

---

# 黄金樹の瞳

エディルン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄金樹の瞳

### 【Nコード】

N08590

### 【作者名】

エディルン

### 【あらすじ】

『黄金樹の瞳』。

四大国のひとつ、リューシャン帝国を打ち立てた建国の大帝、グラガレス・リューシャンは、黄金の双眼を持っていた。それはただの人間の目ではなく、千里の果ての地の出来事を見通し、人の心をガラスのごとく見通す眼だった。

この大帝の持つ瞳のことを人々は、伝説に語られる知恵の実を実らせる木の名をとって、『黄金樹の瞳』と呼んだ。

あらゆるものを見通す大帝の瞳は、多くの人々に恐怖と畏敬、憧

れに尊敬。さまざまな感情を抱かせずにはおかなかった。  
それから、300年もの時が過ぎ去る。

もはや、黄金樹の瞳が、ただの伝説の時代の物語として語られる時代。

突然の洪水によつて、家族と住む場所を失つた少年アルフォード。何もかもを一瞬で失つた少年は、そこでラーベラムと名乗る女性に助けられた。流星の尾を束ねたような、神秘的な銀色の髪的女性。

彼女が申し出る契約を受けたとき、少年の瞳に、黄金の輝きが宿る。

## 前奏（前書き）

前書き

この物語が何であるか？

それは、書いている私にもわからない。

実を言うと、私は彼らが進む姿を書いているだけに過ぎないからだ。

その先に待ち構えるであろう、困難も喜びも、希望も絶望も……あるいは、そのようなものが果たして出てくるのかもわからない。

なぜならば、物語を紡ぐ人間さえもが、この物語の先にある話を知らないのだから。

ただひとつ願うことがあるとすれば、紡がれいく彼らの先に、わずかなりとも希望の光があらんことを。

（読書前に 作者よりのメッセージ）

## 前奏

### 前奏

東西数千キロにわたって広がる、広大な大陸リューシャン。

この大陸には四つの大国が存在する。

西から順に、

かつて共和制国家として存在し、今は帝政となったロマーナ帝国。首都近郊に百万の常備軍を持つと豪語する、軍事大国リューシャン。

術界の国と呼ばれ、三千年の時をただ一つの王朝が納めるエンシエントガーナ。

そして広大な領土から産する豊かな物産によって、大陸随一の経済力を誇る華国。

これらが、この大陸に存在する大国の名だ。

この中の一つ、リューシャン帝国の建国には、次のような話があった。

建国の大帝グラガレス・リューシャンは、黄金の瞳をしていた。

それは人間の瞳ではない。千里の彼方を見通し、人々の心の中をガラスの如く見通す瞳。

その瞳の前ではすべての存在が、隠れることがかなわず、大帝はすべての者を見通すことができた。

その力を持って、大帝が率いる軍勢は諸国の軍隊をことごとく退け、数多くの国々を征服することで強大な国家を打ち立てた。

それが大陸に君臨する四大国のひとつ、リューシャン帝国だ。

そんな大帝の瞳を、人々は畏敬と憧れ、そして恐怖をもってこう

呼ぶ。

『黄金樹の瞳』

あるいは『黄金の双眼』と。

黄金樹とは、知恵の木の実とも言われ、その実を食べたものは、すべての知識を得るとされる。すべての物事を見通す大帝の瞳は、まさに黄金樹そのものと言って過言でなかった。

とはいえ、大帝にとって決して抗うことのできないものがある。

大帝の死。

歳を得たものに訪れる老いと死が、大帝にも等しく訪れたのだ。

大帝の死後、再び黄金樹の瞳を持ったものは現れなかった。

そのため時間の変遷とともに、黄金樹の瞳は、伝説の時代のこととして、人々の間で語り継がれていくだけとなった。

人々はこの伝説を聞き、黄金樹の瞳の力に、焦がれる者もいた。とはいえ、伝説の力に焦がれることはあっても、そのような瞳が再び人の世に現れるなど誰が思うであろう。

もはや、誰もが伝説であり、ただのおとぎ話としか思わない程度に、時が流れているのだから。

## プロローグ：激流

プロローグ：激流

ドカーーーーーッ!!!

少年には、その音が何を意味するのか、まるで理解できなかった。いや、それ以前に理解する時間すらも与えられなかった。

少年がその音を聞いた瞬間、彼は自分が息をすることもできないまま、強力な力の中に押し流されてしまった。

たった今まで、家族と共にいたのに、その光景がまるで嘘か幻であつたかのように、消え去つた。

(助けて!……母さん……父さん)

少年は無意識にそれだけを思った。

だが、少年の意識は次の瞬間には消え去っていた。

抗うことのできない、強力な力に、ただ少年は何もできないまま飲み込まれていった。

それから、どれだけの時が立つたのか分からない。

少年は再び意識を取り戻していた。だが、頭も体もひどく重くて、クラクラする。目を開けることだっておぼつかない。

微かに開いた瞼の間から、暖かな光が差し込んだ。

パチパチ、パキンッ

(焚火?)

まだはつきりもしない意識の中で、少年はぼんやりと思う。

「……………」

何かを言おう。そう思って、口を開こうとしたが、口から出たのは声にもならない、うめき声だった。

自分の体がひどく重い。こんなのは初めてだ。

「気が付きましたか？」

突然、少年に語りかける声があった。

「君は、っ！！！」

訪ねようとして、だか少年は思わず体中から襲ってくる悲鳴に声を上げた。

痛い、それも今までに感じたことのない痛みが、体のそこかしこから声を上げてくる。

息が口から漏れる。

「いけません、まだ動いてはダメです」

語りかける声にそう言われる。

少年は力なく、その声に従うしかなかった。どうやっても、体に入らない。それよりも、今は体を動かすとすごい痛みが襲ってくる。でも、動かなければ、痛みは襲ってこなかった。

「ルールラー」

そんな少年の傍で、歌声が聞こえてきた。そして、少年の額に暖かな体温を感じる。

「おっ、おかあ……………さん」

「動かないで、今のあなたはまだ動けませんよ」

体から上がる痛みもこらえて、少年はおぼつかない声で、その人の名を呼んだ。しかし、以外にも少年に帰ってきたのは、母の声ではなかった。それでも、なんだか気持ちよくて、安心できる声。

それは本当にお母さんが近くに来てくれるように思えた。

少年はその優しさに抱かれて、再び意識を失った。だが、今度は暗闇の飲み込まれるように意識を失ったのではなかった。

少年が気をしなかつた後も、穏やかな歌声は周囲を満たし続けて

いた。

チュンチュン

「ここは……どこ？」

小鳥の声と太陽の暖かな光。少年が再び意識を取り戻した時、そこは知らない場所だった。

木々に囲まれた、小さな広場だ。こんな場所を少年は知らない。

ただ、昨日は体を動かすことさえできなかったのに、今は体が自然に動いた。

しかし、少年はそのことを不思議に思わなかった。それよりも、知らない場所に自分がいることに、不安を感じる。

「お母さん、どこ、どこにいるの！」

少年が不安になって声を上げる。

「おかあさーん！」

再びの声も、しかし森の木々に反射して、こだまするだけ。

周囲には、誰もいない。

自分1人だけ、知らない場所にいる恐怖が少年の心に襲いかかってくる。

「うっ、うっ」

すぐさま少年の不安は限界に、目から大きな涙になってこぼれおちる。

「うっ、おがーざーん」

声の声になっていないが、それでも母を求め、少年はなくことをやめられない。

「まあ、気が付きましたか？」

と、少年が不安に耐えられなくなっていたところに、声がした。

少年が振り向くと、そこには1人の女性が立っていた。少年が期待する、母親の姿ではなかった。

だが、少年にはそれよりも、その女性から目を離すことができなくなってしまうた。

銀色の流星の尾を束ねたかのような、銀色の長い髪の女性。どこか不思議な雰囲気を漂わせ、付きを思わせる美麗な顔たち。髪と同じ色をした瞳が、不安に駆られる少年を見つめていた。

「よかった、もう体は大丈夫みたいですね」

キュッ

安堵する女性。その女性の服を、少年は両手で力いっぱいつかんだ。

「大丈夫ですよ。私はどこにも行きませんから」

「本当？」

人がいてくれた喜び。そして、再びいなくなってしまうのではという不安が、少年にこのような行動を取らせる。

「大丈夫ですよ。それよりも、お腹すきませんか？」

よかつたら、これを食べてくださいね」

そういつて、女性は両手に抱えている果物を少年に差し出した。

「いらない」

「そうですか……」

「お水！」

「はいはい、水筒のお水ですよ」

少年の要求に、女性は笑顔で答えてくれた。

女性が差し出した水筒を、少年はすぐさま奪い取るようにして取る。そして、急いで水を飲みだした。

喉が渴いていた。

ひどく、乾いて苦しい。

「落ち着いてください。あんまり急に飲むと」

「ゴホゴホっ」

「……言っのが遅かったみたいですね」

あまりに慌てて、水を飲もうとするものだから、それに体が追い付けずにむせかえる。

しかし、再び少年は水を飲み、そして女性が手にしていた果物も、おお慌てて、食べ始めた。

その間、女性はただ穏やかに少年の言うことを聞いている。

「でも、よかったです。三日間も意識が戻らなかつたから、さすがに私もダメかと思いました」

「僕、そんなに寝てたの」

「ええ」

女性の言葉に、少年が驚く。例え、少年は朝寝坊をすることがあっても、そんなに寝ていることはない。

そのことを口に出して言うと、女性はクスクスと笑った。

「まあ、では大変な朝寝坊でしたね」

「うん、こんなに朝寝坊をしたのは初めてだ」

「アハハッ」

少年の言い方が面白かつたのか、女性はその後しばらく笑い続けた。笑いが止まらなくなつて、ついには笑いを止めようと必死になる。

「ひどいなー、そこまで笑うことないじゃない」

「ごめんなさい。クスクス、でも面白い坊やですね」

「坊やじゃないやい。アルフォードって名前がちゃんとあるんだ！」

「そうですか、アルフォード……アルでいいですね。そう呼んだ方が可愛いですし」

「可愛いじゃないやい！」

「はいはい、かつこいいですね、アル」

「うん、そうだろう」

女性の言葉に、少年は気持ちをよくする。

さつきまでの不安はもうどこかに行っていた。なぜか、彼女といると、少年アルフォードの心は、ひどく落ち着くのだ。

まるでお母さんと一緒にいるかのよう。

「しかし、アル。驚きましたよ。私が歩いていると、激流に吞まれたあなたの姿が見えたのです」

「ゲキリユウ？」

「川が氾濫したのです」

「ハンラン？」

女性の言葉に、あるが不思議そうに繰り返す。言葉の選択がまずいと思っただけ。すぐに彼女は、子供にでもわかる言葉で話すとにした。

「川の水がたくさん流れたのです。その水のせいで、町や村がいくつも流されたんです」

「そんなことがあるの？」

「はい……」

アルは、その流れに流されたのですね。

そう、女性は心の中で付け加える。子供に対して言うべき言葉に思えなかったのだ。

そしてあの流れの中から、アルを助け出したのも彼女だ。

「でも、よかったです。アルが無事でいてくれて」

「うん、よく分からなかったけど。僕を助けてくれたんだよね。ありがとう、おばさん」

よくは理解できてないだろうが、それでも自分を助けてくれたのが、彼女であることはアルも分かったらしい。それに、彼が気を失う瞬間に聞こえていたのは、彼女の声だった。

だが、そんなことはどうでもいい。

「オ、オバ、オバなんですって！」

それまで穏やかだった彼女の表情が、急激に剣呑になる。

「だから、ありがとうオバ……ムグッ」

「いいです、それ以上何も言わないで」

「ムグムグッ！」

彼女はアルの口を手で押さえ、無理やりしゃべれなくさせた。

「いいですか、今度から私のことはこう呼んでください。美人のお姉さんって」

「やだ、おばさん、じゃん」

「！」  
子供の正直すぎる言葉に、おばさん……ではない、彼女はことを失った。

「どうしてでしょうね。どうして、子供ってこんなに残酷なのでしょう」

陰の入った様子で、彼女は思わず呟く。

そんな彼女の姿に、さすがにアルも、少しためらいを覚える。

「じゃあ、おばさんと、お姉さんはやめましょう。私のことはラーベラムって呼んでください」

「ラーベラム？それが名前なの」

「はい、私の名前はラーベラムです」

「変な名前」

「！」

再びショックを受ける、女性……ラーベラム。

「ふうつ。子供って、どうしてこんなに可愛いんでしょうね」

「イダダダ、ラーベリヤミヤ、手をはしえ」

笑顔になって、しかし表情とは完全に裏腹に、ラーベラムは少年の正直すぎる口をつねった。おかげで、アルの言葉がおかしくなっている。

「本当は、美人の素敵なラーベラムお姉さんって呼んでくれたら、私も嬉しいんですが」

心の願望を素直に表現するラーベラムだったが、しかしアルは白い目をしていて。

「ブーブー、ラーベラム変だぞ」

「まあ、私に向かって、そんなことをいう子はあなたが初めてです」

「やーい、変なラーベラム」

「ムキー、だから私は美人で……」

「ラーベラムって、本当に変なの」

「……」

変な者扱いされ、ラーベラムはすっかり気落ちしてしまった。

「ああ、命の恩人の私に向かってこんな扱いをするなんて……」

ラーベラムがクヨクヨすると、さすがにこれはやりすぎだとアルも思っただらしい。

「あんまり落ち込むなよ。ラーベラムが変だからって、僕は全然気にしないからな」

アルはそういうが、フォローにならないフォローだ。

「へ、変……」

すっかりいじけてしまう、ラーベラム。

だが、そんな会話をしている時だった、アルはラーベラムの足がおかしいことに気づいた。

「ねえ、ラーベラム。足が光ってる」

さっきまでの様子はどこへやら、アルは不思議そうにラーベラムの足を指差した。

「ああ、これですね。どうやら私も長くなさそうですね」

「長くない？」

「はい、人間で言う、死ぬってことです」

「死ぬって？まさか、ラーベラムは死んじゃうの！」

突然の死という言葉に、少年が動揺する。

「……はい、せつかくアルに出会えたのですが、どうやら私はもうダメみたいです」

「そんな、死んじゃだめだよ、ラーベラム！」

「すみません。私もアルともっと一緒にいたいんですが、これ以上は持ちそうにないですね」

そう話す間にも、ラーベラムの足が消えていく。彼女の体から淡い光がはじけるたびに、徐々にラーベラムの姿が消えていく。

こんな光景をアルは一度も見たことはない。村で人が死んだときには、みんな眠ったようになって動かない。その光景は見たことがあるが、これはアルの知っている死とは、まるで違う死に方だ。

「いやだよ。ラーベラム死なないで。消えちゃヤダよ」

「……」

少年の言葉に、ラーベラムの顔が物悲しそうになる。

「……では、あなたは私と共に生きてみますか？」

ラーベラムは不思議な様子でたずねる。表に出してはならない感情が、いまにも溢れそうだが、それでも決してあらわにしない感情。

「ラーベラムが生きれるんだったら、僕何でもするよ」

「ですが、私と共に生きるということは、簡単なことでは……」

「そんなことはいいから、ラーベラム生きてよ。死んじゃだめだ」

アルが大粒の涙をボロボロとこぼしながら、必死になってラーベラムを両手でつかむ。今にも消えてしまいそうなラーベラムを、消えないでくれと必死につなぎとめようと、力を振り絞る。

不思議と、少年に力強くつかまれた部分だけ、ラーベラムの姿ははつきりとしている。しかし、それ以外の部分は、淡い光と共に、いまにも消えてしまいそうだ。

（今回で、終わりにするつもりでした。

ですが、まだ脈が残っていたみたいですね）

ラーベラムは、心の中でつぶやいた。

それから彼女は、自らの体の境界が、急速に失われていくのを感じた。

もう、ラーベラムは、ラーベラムとしての意識を持たない。

急速に体の境界を失っていく彼女は、消え去った。

「ラーベラム。」

ねえ、ラーベラム。

どこにいるんだよ。隠れてないで出てきてよ。  
どこに行ったの」

淡い光と共に、体を失ったラーベラムの姿はどこにもなくなっていた。

まるで、夢で見た幻が消えてしまうかのように、彼女の姿は失われてしまった。

ただ、彼女がただの幻ではなく、存在していたことを表すかのように、少年の手に、淡く光る粉が残っている。

「ラーベラム」

いなくなってしまった彼女の名を、少年は叫びながら呼び続けた。それでも、彼女はいなくなっていた。

どこにも……

「グスツ、グスツ」

大粒の涙と、鼻水を流しながら、アルは森を抜けていた。だが、そこに広がるのは、ひどく破壊された世界だった。

少年のアルには思いもつかない……いや、大人であつてもこのようなことは思いもしない。

巨大な河の氾濫が、辺り一帯を飲み込んでしまった。

辺境ののどかな地方が、今では荒れ狂う身がよって徹底的にす

べて破壊されてしまった。川の流れが運んできた土砂によって、大地は泥に覆われ、草木の姿はどこにも見えない。

反乱の名残で、そこかしこに巨大な水の池ができていて、破壊された世界の姿だけがそこに広がっていた。

「うつつ、うわわわーん」

心さびしさに、目の前の光景。

もはや、アルにはその場で泣くことしかできなかった。

「これはひどいな。河の氾濫とは聞いていたが、まさかこれほどとは」

そんなアルの傍で、声がした。

未だに涙をこらえることもかなわないアルは、そのままの姿で声のした方を見た。

「坊や、大丈夫……」

声をかけたのは中年のおじさんだった。

だが、その言葉が途中で途切れる。

洪水の被害の光景に、心奪われた以上に、大人の目が大きく見開かれる。

「黄金の色の瞳!？」

「うつつ」

大人の言葉の意味が分からない。それにまだアルは涙さえも止められない状態だ。

「まさか、黄金樹の瞳じゃないよな!？」

「オジサン、何を言ってるの!」

大人の言う意味が全然分からない。

黄金樹の物語は、アルも聞いたことがある。

昔、この国を作った偉い王様の瞳を、黄金樹の瞳という。誰だっ  
て知っている話だ。

だが、それと大人が今口にしてしている言葉の意味が、アルには全く  
理解できなかった。

「まさか驚いたぞ。伝説と思っていたが、本当にいたんだな。黄金  
樹の瞳を持つ人間が！」

驚く大人。だが、それに反して、アルはますます不思議に思う。

なんだろう。言ってることが全然分からない。

疑念を抱くアルに、しかし大人は突然アルの体をつかんだ。

「君、名前はなんて言うんだ」

「いた、痛いよオジサン」

「ああ、すまない。強く握りすぎたようだな」

アルの小さな悲鳴に、しかしそれでもオジサンがつかむ手の力は、  
少しも弱まらない。

「きみは何者だ。」

どうしてその瞳を。

まさか伝説と思っていたが」

興奮していて、次々にオジサンは言葉を口にする。

言ってる本人でさえ、もはや言葉の意味はわかっていないだろう。  
それほどに、このオジサンは、興奮していた。

まるで、目の前に伝説を見ているかのような、孤独興奮している  
様に。

「ねえ、痛いよ。手を離して！」

「……あつ、ああ。分かった」

アルの言葉に、ようやくオジサンは反応した。それまで握ってい  
た手を離してくれた。

「ありがとう。でも僕もういくね」

「行くなって、どこに？」

「お母さんとお父さんを探さないといけないんだ」

そう、口にするアル。

「探す？もしかして、君はこの洪水の被害にあったのか？」

「よく分からないんだ。気がついたら、ラーベラムって変な人に助けられたの……でも、ラーベラムは死んじゃった」

アルはそういって、握りしめていた両手を見る。そこには光となつたラーベラムが、唯一残した淡く光る粉が、まだ握られている。

「死んだ……そうか、この洪水だからな」

そんなアルノ姿に、オジサンも同情する。ただし、ラーベラムを、彼は人間だと思つたらしい。

「……早く、お母さんたちを探さない」と

「そうか、ならば私も協力しよう。是非とも、君のことを知りたいからな」

「ありがとう。オジサン」

手伝つてくれることを申し出たおじさんに、アルは感謝した。

ルートニック。

それが中年のオジサンの名前だ。

アルとルートニックの2人は、すっかり地形が変わってしまった泥の大地を歩いていた。

どこもかも泥の大地。

「ヒドイものだ。」

このあたりには、小麦畑が広がっていたのに。

ここには、緑の森があつて……

これではもう家畜も全滅だな」

大地を歩きながら、ルートニックはさまざまに呟く。

「ねえ、おじさん。僕のお母さんたちは大丈夫だよな」

アルの言葉に、ルートニックは一瞬黙りこんでしまった。歩いて  
いる間に、アルの身に何があつたの聞いていたのだ。

家において、突然何かに襲われるようにして、気を失った。

おそらくは、家にいたところで、反乱した河の流れが襲ってきた。  
逃げる暇どころか、自分の身に何が起こつたのかさえ、理解する暇  
もなかったのだらう。

そのように、ルートニックは考えた。

しかし、そうなるこの子が流されてきたのは、河のさら  
に上流。

たどり着いたとしても、家族はおそらく……

ルートニックの胸中に思っていることは、少年のアルにはまだ分

からない。それでも、顔を見ただけで不安な表情をしている。

「大丈夫だ。心配しなくても君の家族は無事だよ」

そう、気休めの言葉を少年にかけてやりたくも思うが、だが現実を思えばどうしてもルートニツクには、そのような言葉を口にすることはできない。

「とにかく、君のいる家にまで行ってみよう」

「……うん」

アルは小さく頷くだけだった。

「あの山は、僕がいる家から見える山だよ。でも、村が……」

アルの知っている場所にまで2人はたどり着いた。

だが、そこから見えるであろう村の景色は、そこに存在しなかった。

濁流と化した川が、山間の谷を覆い尽くしている。洪水を起こした大雨はすでに終わっているが、いまだに勢いを完全に失っていない。その濁流だけが、ゴウゴウと激しい音を立て続けている。

もはや、そこに広がるのは、アルの知っている光景ではなかった。

「そんな、どうして……」

ポツンとつぶやき、アルはふらふらと前に歩いていこうとする。

「危ない、これ以上は進めないぞ！」

とつさに、ルートニツクがアルの体を押さえる。

「やだ。やだよ。やだやだやだ」

だが、アルはルートニツクに抗して暴れる。

子供の力とはいえ、その力は理性を失っていた。大人のルートニツクも力づくで、おさえないと今にも逃げられそうだ。

「いやだ。離せ、離してよ！」

母さん！父さん！

皆！

みんながいるんだ！」

「ダメだ。今あそこに行けば、君まで死ぬぞ！」

ビクンッ

死ぬという言葉に、アルの体が痙攣する。

「そんな……嘘だよ。死んだなんて」

「……」

しまった。言うべきでない言葉を口にしたことに、ルートニックは後ろめたい思いになる。

「そんなはずないよね。だって、母さんも父さんも、それにそれに

……つうつつ、うええええ」

地面に突っ伏して、アルは泣き始めた。

泊まることのない涙が、流れ続ける。

泣きじゃくり、鼻水を流し、それでも止まることのない悲しみに覆い尽くされる。

「だがな、君が助かっただけでも、奇跡だよ。

村の姿がないってことは、すべて水に飲み込まれたってことだ。

そう、君の家族や、知っている人たちは全員、もうこの世にはいない……」

とまることのない悲しみの少年の傍で、ルートニックは苦い思いを持ちつつ、その場に腰を降ろした。

(この洪水はひどい。なんてことだ。だが思いもしなかった。

まさか、こんな場所で伝説の『黄金樹の瞳』を見つけるとは……)

ルートニツクはアルに付き合っつて、アルの住んでいた村の傍まで共にやってきた。

だが、それは彼が人がいいからでも、また無条件にアルのことを心配してのことではなかった。

### 『黄金樹の瞳』

千里の果ての光景を見通し、人々の心をガラスのように見通すことができる伝説の力。リューシャン帝国の初代皇帝が持つとされる、300年も昔に現れた伝説の力だ。

とはいえ、もはやそれはただのおとぎ話としか思われていない。

だが、ルートニツクが見つけたのは、紛れもない黄金色の瞳だった。

こんな色の瞳を持つ人間は絶対にいない。

だが、ルートニツクはその伝説を見つけたのだ。

その人物の右目は青い色の人を見していた。

しかし左目には、黄金色の輝きが宿っていた。だからルートニツクは、その人物に対して親切にしたのである。

そして、できることならば、その少年がなぜ黄金の瞳を持ってい

るのかを知りたかった。

その人物の家族であれば、あるいはと思ったが、それも洪水の被害で聞き出せそうになかった。

しかたなく、ルートニツクは黄金の瞳を持つ人物が、泣きじゃくるままに任せた。

やがてその人物は悲しむことに疲れ果てて、意識を失うかのよう  
に眠ってしまった。

仕方なく、ルートニツクは近くに野宿をできそうな場所まで、その人物を抱えて移動した。寒くないようにと、自分の外套をわざわざかぶせてやり、野宿できる場所では火を起こす。

それでもその人物は疲れ果てて起きない。

当然だろう。あれだけの光景を直視するには、その人物の年齢が小さすぎるのだから。

大人である自分でも、もしも自分の住んでいる街が一瞬で失われようものならば、どうなるか分かったものではない。

そんなことを思いながら、ルートニツクは塩辛い干し肉をとりだした。

「今日の晩飯はこれだけか」

別にうまくもない食べ物を食べる彼の顔は、しびしびと食べているという感じだ。

ただ、その瞳は自然と、近くで休んでいる人物の方へ移る。

その寝顔は無邪気な天使という感じだ。

赤焦げた色の髪をした。まだ10歳にもならない小さな子供だ。

「アル、お前は一体何者なんだ？」

どうして、黄金樹の瞳を持っている？」

そう尋ねはするものの、少年は静かな寝息を立てている。

だが、不意にその呼吸が乱れて、苦しそうに喘ぐ。

「うつつ、お母さん、お母さん」

悪夢があ沿ってきたのだろう。

当然だろう。

苦しむ少年の傍で、しかし何もしてやれないルートニックは、ただ静かに傍にいてやることしかできなかった。

あるが目覚めたとき、そこはまた知らない場所だった。  
今度も、知らない人が傍にいる。

いや、名前なら知ってる。ルートニックという名前のオジサンだ。  
昨日ラーベラムが死んでしまつて、それから最初に出会った人。  
一緒にアルの住んでた家を探してくれて……それで……

「うっ」

そこまで振り返つて、アルは思わず吐き出した。  
喜納の光景が脳裏によみがえつた瞬間、胃の中のものが逆流して  
きた。

「ゲエエツ、ウエツ」

地面に突つ伏して、出てくるものを吐き出す。

「そんな、どうしてこんなことになつたんだ」  
弱々しい声を出すアル。

そんなアルの姿を、眠りから冷めたルートニックも認めた。

「おい、おまえ朝から吐くなんて大丈夫なのか？」

「……」

「しまった、またるくでもないことを俺は言つたな」  
思ったことがすぐ口に出てしまった。ルートニックは自分の迂闊  
さを恨んだが、すでに遅い。

だが、そんなルートニックに、アルは小さく言った。

「オジサン、ありがとう」

「あつ、ああ」

昨日あれだけ泣き悲しんでいた少年からの思いもよらない感謝の言葉に、ルートニツクは驚いた。

だが、アルはやはり不安だった。

ルートニツクの服を両手でギュっとなつかむ。

「なあ、頼むから話してくれないか？」

ブルブル

しかし、首を振ってアルは言うことを聞かない。

(やれやれ、俺は子供の相手は苦手なんだけどな)

それでも、アルを無理に振りほどこうとしないのは、ルートニツクがこの少年に同情しているからだだった。

とはいえ、いつまでもそうしてはられない。

「……なあ、もういいだろう」

「……」

「それに、お前ちゃんとゲロをふいたか」

フルフル

「ゲツ、俺の服についてるじゃないか！」

「……ゴメンナサイ」

「ああ、早くふかないといけないじゃないか。

って言うか、着替えがあるわけじゃないし、まさか俺はゲロをつけたまま旅をしないとイケないのか！」

「ゴメンナサイ」

「謝らなくてもいい。」

畜生。俺ってついてないなー」

そう言いながら、ルートニツクはなんだか惨めに思う。でも、そ

んなルートニツクの姿を見ていて、少年はほんの少し、そう、本の少しだったが元気づけられるのだった。

その後、ルートニツクは火をおこして、塩辛い干し肉を焼き始めた。

グキュルル---

「お前、お腹すいてるな」

フルフル

首を振るアル。

「涎が出てるぞ」

「あっ！」

慌てて口の周りをぬぐうアル。

「ほら、これぐらい焼けばいいだろう。お前の分だ、食べよ」

「本当！いいの？」

「ああ、もちろんだ」

「でも、僕のとてことは、おじさんの分は？」

今ルートニツクが焼いた干し肉は一切れだけだ。それがアルの分と言うことは、ルートニツクの分がなくなってしまふ。

「俺はいいんだよ。ちゃんと昨日食べたからな」

そういつて、ルートニツクはアルに焼いた干し肉を渡す。

だが、

グキュルル---

今度は、ルートニツクのお腹が元気のいい音を出したのだ。

「はい、おじさんも半分食べようよ」

そんなルートニツクを見て、アルは自分の干し肉を半分にして、ひとつをルートニツクに渡した。

「……ありがとうよ」

「うん」

子供に差し出すつもりだったのに、逆に自分の方が食べさせてもらってしまった。なんだか、立場がないなと思いつつも、元気に頷く少年の姿に、ルートニックは安心した。

(とりあえず、大丈夫そうだな)

昨日あれだけ落胆の大きかった少年が、元気な顔を見せたのだ。

朝食も終えてた後、ルートニツクに引かれるまま、アルは歩いていった。

あの村にはもういられない。家族も知っている誰もかも失ったアルは、天涯孤独。頼れる人もいないのだ。

そんなアルを、ルートニツクは黙って連れていた。

村の方にはもう戻らないように、自然と異なる方向へ向けて歩いていく。

アルの方も、なぜ村の方に戻らないのかと尋ねない。

あるいは、たずねる勇気が出せなかった。

そんな状態で歩いてきた2人だが、アルが洪水でできた水たまりを何気なく見たとき、そこに不思議なものを見た。

いつもだったら、青い色をした自分の両目が、なぜか片方だけ黄金の色をしていたのだ。

「あれ、おかしいな」

ゴシゴシと目をひすつて、もう一度水たまりに映る自分の顔を見るアル。

「どうしたんだ、何か変なものでも見えるのか？」

「それが変なんだよ」

「変、何が？」

「僕の目がおかしいんだ」

アルの左の眼は、右の眼と同じで青い色だ。

秋の空を思わせる、透きとおった色の瞳。  
なのに、なぜかこのときアルが水たまりに見た自分の左目は、黄金の色をしていた。

「左目が、金色になっている」

「まさか、知らなかったのか？」

「知らなかったって、この目のこと？」

だって、僕の左目は青い色のはずだよ。

でも、今は金色をしてる」

「知らなかった……」

黄金樹の瞳を宿していることを、今まで知らなかったけど？  
ルートニツクの脳裏に疑問がわく。

「なあ、アル。お前本当に、その目のことは知らなかったのか？」

「そうだよ。」

僕の眼は青色だよ。

おかしいなあ、どうしてこんな色になってるんだろ？

不思議だな？」

「なら、いつまでであるの眼は青かったんだ？」

「いつまでって、そんなの分からないよ？」

でも、金色になってるのには、今気づいたばかり」

少年の言葉に、ルートニツクは押し黙った。

黄金樹の瞳が、突然現れた……いや、そもそも俺だって伝説でしか知らないんだから、生まれたときから黄金樹を持っているとは限らないな。

ってことは、ある日突然黄金樹の瞳をもったってことか

深刻に考えるルートニツクに、だがアルは全然気付かないらしい。  
「困ったな」。僕の知ってる人はみんな両方とも目の色は同じなの

に。でも、別に色が違うからって、困ることもないような。だって、いつもと同じように見えてるし」

いつもと同じ……もしかして、千里眼の力も、人の心を見通す力もないのか？

アルの言葉を聞きながら、ルートニツクは、もしかしてアルの瞳が黄金樹の瞳ではないかもしれないと疑問を持つ。

そもそも、ルートニツクはまだアルの瞳が、本物の黄金樹の瞳だと確かめたわけではない。

「なあ、アル。

お前俺が今何考えてるか、分かるか？」

「どうしたの、突然？」

「いいから、答えてくれ！」

「えっ、そんなの僕にわかるわけ……ジュンサツシ？」

あれおかしいな。何でだろう。

変な言葉が思いついちゃった」

「！」

俺が巡察士だとアルに言った覚えはない。

もしかするとこれは……だが、まだ確証は持てない。

仕方ない、ここは時間をかけて確かめるしかないか。

アルの瞳に不思議な力を見てとるルートニツク。それが本物であることを彼は確かめたかった。

幸い、そのための時間はこれからあるのだ。

「お前の眼は目立つからこれをかぶっておけ」

ルートニツクが勝ってくれたのは、フード付きのロープだった。

「えー、かつこ悪いよこれ。どうせ買うなら、あっちの言いな」

「ダメだ。高いから」

「ケチ」

「ケチじゃなくて、俺の今の手持ちじゃ仕方ないんだ。

もともと1人旅のはずだったからな」

「ムー、そうやってルートニツクは、いつもお金お金って言うてる」

「仕方ないだろ！本当にヤバいんだから」

お金お金と言う、ルートニツクにアルは不満だ。

街に着いてから、宿の部屋をとり、ロープを買ってもらった。

だが、そのたびにルートニツクはお金と口にしては、なるべく安く済ませようとしている。

宿の部屋なんて、雨漏りがするオンボロの部屋という有様。

アルに買ったロープにしても、黒い色のものすごく地味な色をしていた。それで生地が頑丈ならまだしも、すぐに破れてしまいそうな、薄い布でできていた。

「ルートニツクって、貧乏だね」

「貧乏いうな！」

……今から昼飯にするけど、何ならお前は俺が食つのを見てるだけでもいいんだぜ」

「えっ！ごはん。もしかして、お店で食べるの？」

「そつだとも。せつかくの街なんだ。」

「ちゃんとした飯を食わないと、やってられないだろ」

「そつだよな。」

僕たちつて3日間歩き続けたけど、食べたのつて塩辛い干し肉だけだもの」

ルートニツクが旅の野宿のために携帯していた干し肉はひどく辛い。おいしくないわけではないが、いつも同じなので2人ともとつくに飽きている。

それに、もともとがルートニツク1人分しか用意していなかったので、万属のいく量を食することもできなかった。

大人のルートニツクにとつても空腹はつらい。だが、成長盛りのアルには、空腹はもつところえた。

「俺は貧乏だから、アルの分はなしだな」

「ひっ、ひどいよそんなの！」

ルートニツク、お金持ちだね。

うん、絶対にすごいお金持ちだよ。

だから、僕にもごはんちょうだい！」

「お前調子がいいよな」

「お腹が空いてるんだ、早く行こうよ。」

あつ、あそこのお店から、いい臭いがするよ！」

おいしい臭いにつられて、駆けて行くアル。手を振りながら、早くルートニツクに、来て来てと呼んでいる。

「ま、お子様だからな」

そういい、アルの少年らしい健気な姿に、思わず笑みがこぼれる。

「だが、この店はダメだぞ。」

絶対に高いから」

しかし、アルに追いついたルートニツクの第一声はこれだ。

「えー、でもお腹が空いて倒れそうだよー」

「ダメダ。」

あっちの店にするぞ」

「……ねえ、ルートニツク。本気なの」

「もちろん本気だぞ」

ルートニツクが指さす店は、どう見ても三流の料理しか出さない店だ。それも、安くてまずくて、量だけはあるという感じの。

「ルートニツクのケチ」

「じゃ、アルの分は……」

「わああっ!!」

今のは冗談だよ

わーい、ご飯だご飯だ!」

「よろしい。子供は素直が一番だ」

「ご飯で子供心をつるルートニツクだった。」

アルとルートニツクの旅は続いていた。

「ねえ、ルートニツク。僕たちってこれからどこへ行くの?」

「知りたいか?」

「当然じゃん!」

にはつとした顔で言うアル。

「……お前、帝都は知っているか?」

「テイト?それってどこにあるの?」

「いいか、お前はこれから俺と一緒にこの国の都に行くんだ」

「ミヤコ?」

「大きな街だ」

「それって、どのくらい大きいの?」

「この国で一番大きな街だ。そうだなここからあの地平線まで続く  
ぐらいの街だな」

「へー、それってすごいね」

いま一つすごさを分かっていない様子のアルだ。

しかし、そんなアルの姿に、ルートニツクは気になることがある。

「なあ、お前、俺についてきてるけど。本当にいいのか?」

「いいって、何が?」

無邪気な顔でアルが訪ねてきた。

アルの黄金色の左目がルートニックを見つめている。伝説ならば、アルの瞳はすべての人間の心を見透かすのだという。

ならば、ルートニックが思っていることも、アルには分かるはず

……

だが、そんな様子などまるでアルには見られない。

「あんな、お前は知らないお兄さんについてきてるんだぞ」

「お兄さんって、もしかしてルートニックのこと？」

「そうだ」

「ルートニック、そんなの冗談言える年齢じゃないでしょう」

もう、40近くのルートニックだ。

実年齢は伏せるにしても、確実に中年オジサンなのだ。

そんなルートニックのあまりにも無謀な見栄に、アルは冷淡だった。

「ゴホン、とにかく、お前は俺についてくるんでいいんだな？」

「だって、そうするしかないもの」

「そうするしかないもの」そう言ったアルの表情は、妙に澄んでいた。しかし、そこにはまるで感情がない、ガラスのような透明さだった。

「お前」

「ねっ、だからいいんだよ」

「……」

小さな子供が、そんな言葉を口にしたことにルートニックは何も

言えなくなっていました。

ただ一言、

「わかった」

それだけ言い、ルートニックは静かに歩き始めた。

## 8 水面の都市

### 8 水面の都市

リユーシャン帝国を東西に分つ大河、ユフラス。

この河は帝国を北から南へと流れる大河で、その河口付近は帝都の近郊にまで続いている。

川幅は広い所で数キロにもなり、その深さは大型船の交通も可能にしている。

帝国を南北に貫く、重要な交通路。そして物資の運搬路でもある。帝国の人の流れと物流を支える、重要な大河なのだ。

ルートニックに連れられた、アルは、この大河をゆく船に乗っていた。

「ねえ、ルートニック」

「……」

「僕どうせならあつちの大きな船に乗りたかったな」

「……」

「ねえねえ、乗りたいよー」

「ダメだ、金が足りない」

「ちえっ、ルートニックのケチ」

ケチだろっがなんだろうが、金がないのだから大きな船に乗ることとはできないのだ。ルートニックはたいした膨らみのない自分の財布を手に持ち、そしてため息をついた。

「どうしてだろうな。」

金つてやつは入ってくるときは、重いはずなのに、出ていく時には、まるで羽がついてるかのようだ」

「言ってる意味が全然分かんないよ？」

「だろうな、子供に分かるはずがない」

現実のつらさをこぼすルートニツクだ。

しかし、本当に現実と言う奴はつらいものだ。

何しろ、アルが大型船に乗りたいたいと言っているが、ルートニツク達が今乗っているのは、オンボロの漁船なのだ。

それも今にも沈んでしまいそうで、大型船が近くを通るたびに、右へ左へ、激しく揺さぶられている。

その船を選んだ……いや、選ぶしかなかった理由は、無論ルートニツクの路銀のためだ。

「なあ、爺さん。本当にこの船で帝都まで無事にたどり着けるんだろうな」

「ホッホッホッ、安心せい。まだ沈んだことはないから大丈夫じゃぞ」

「全然安心できねえ」

「ホッホッホ」

のんきに笑うのは、船の持ち主のお爺さんだ。

ザブン、ザバン

グラグラ、グーラ

近くを大型船が通り過ぎるた。船が激しく揺さぶられて、船の入りから水が若干入ってくる。

「わーい、楽しいなー」

「……………」

「大きい船にも乗りたいけど、この船って面白いね」

「……………」

「あれ？どうしたのルートニック。」

「さっきから全然しゃべらないね？」

「気持悪い……………」

「へっ？」

「オエエエッ」

激しい揺れで、とうとう船酔いしてしまったルートニック。

「ホッホッホ」

船の上では、お爺さんがのんきな笑い声を再び上げるのだった。

突然だが、視点が変わる。

その人物は森の中で目覚めた。まずは眠気を払うかのように、肩を回し、伸びをする。

「うーん、私はどれぐらい寝ていたのだ？」

そういつてね立ち上がる。

「おっと」

ドテッ

すぐにこけてしまった。

「まったくなんて様だ。この前と身長が随分違うな、おかげでバランスがとりにくい」

そんなことを言つて、その人物は不満げな顔をする。

「よっと」

しかし、すぐに反動をつけて立ち上がる。

パンパンと手に付いた土をはたき落とし、そしておもむろに前髪を書きあげる。

瞼を閉じて深呼吸をゆつくりとする。それからゆつくりと瞼を見ひらく。青い色の瞳が、周囲に広がる世界を映し出した。

何の変哲もない森の中、森の緑色の景色が、しかしやけに新しく、眩しく感じられる。

「んっ、いい景色だ。諸君には感謝する」

森の木々に向かってそういつと、その人物は手を振りながらその場を後にした。

ほどなくして、その人物は河にたどり着いた。

「どれどれ、私の顔はどんなのかな？」

そう言い、川面に移る自らの姿を確かめる。

そこに映っていたのは、金髪碧眼の青年の姿。

にやりと笑い、それから左右に動かして、顔の形を確かめる。笑ったあとは、怒った顔や、困った顔に、泣いた顔、さらには呆けたような顔までして見せた。

そのどれもが、絵になる顔立ちだ。並の容姿ではない、美しい相貌をしている。

とはいえ、女のような姿ではなく、自信をもった男の姿。

男々しすぎず、それでいて女の容貌ではない。

何やら不遜な姿をした青年だ。

青年は透きとおる金髪をゆっくりとかき揚げ、気障な笑みを浮かべた。

「残念だな、今度は男か」

そう言い、男は自分の体を見る。

体は、一糸まとわぬ姿だった。無駄はないが、それでいてしつかりとした筋肉のついた体。筋肉を撫でまわし、それから青年の視線は自然と、女性にはないでっぱりの方へと移る。

「ああ、なんてことだ、ラーベラム。私は前の姿が気に入ってたのだぞ。

あの銀の歌姫とまで呼ばれた姿が、何という様だ。

今では男になってしまった……」

ラーベラムのことを口にして、男は嘆きの声を上げる。

「ああ、それに私の声も変わってしまった……」

青年の声は、女性の透き通る声ではない。それはそれで美声なのだが、それでも女性のように透きとおる響きを持った声ではなかった。

「これでは歌姫は無理だな……第一、男が姫になってはとんでもない侮辱だ」

何やら当たり前のことだが、どこもかしこもおかしなことを口にしている。

青年はまるで、自分がつい先ほどまでは女でいたかのような口ぶりなのだ。

「ま、仕方がない。

それより、今回の契約者は確か男だったな。

……うん、覚えているぞ。前のラーベラムだった頃の記憶を」

そう口にする。

前のラーベラム。

そう口にした青年は、不適な表情をして、耳をすませた。

「ちょうどいい、私好みの展開だ」

そういうと、青年はあろうことに、裸体のままでその場から駆けだした。

「我が名はラーベラムだ。  
下賤の者どもよ、よく覚えておくがよい」

10

いきなりだった。

山賊の群れと、山賊に襲われていた行商の前に立ちはだかった青年が、そういったのだ。

見目麗しい……と言いたいが、青年は何を狂っているのか、全身裸体の姿だった。

葉っぱ一枚すらない。全身本物の裸体の姿。

このあまりにも突然すぎる珍客の到来に、それまで山賊に脅えていた行商は啞然となった口が塞がらなくなった。

山賊の方も、交易商とにたような顔になってしまふ。

「なんだどうした、私の姿に圧倒されて声もでないのか？」

青年は気障な声で言う。

ずいぶん格好をつけているが、全身裸体で言うのだから、格好いも何もない。

せめてもの救いは、彼が美貌の青年ということだけだが、この場にいるのは全員男なので、黄色い歓声上がるわけでもない。

「なんだ、お前は？」

「ハッ、これだから低能は困る。」

私の名はラーベラムだと言っただろう！」

そう、自分の名前を豪語する青年。

「ボス、どうしやす。

こいつきつとこれですぜ」

山賊の1人が、自分の頭を指差しながら言う。つまり、頭がおかしいと表しているのだ。

「おまけに、あの格好じゃ、金目のものなんてありやしませんぜ」

もう一人の山賊はそう言う。

そりゃそうだ。

本当の意味での全裸の人間が、何か金目のものを持っているはずがない。

「とはいえ、あの格好なら、その手のところなら高く買い取ってくれるそうですぜ。

頭がアレでも、見た目さえよければ金になるんじゃないですか」  
「なるほど、そういう手があったな。

グヘヘヘ、野郎ども、あの変態を今すぐとっ捕まえろ！」

山賊たちの話はまとまったらしい。

金のない人間でも、金になるならそれでいい。

ラーベラムと名乗った青年と、その傍にいた行商を、山賊たちは一斉に取り囲んだ。

「へええっ、どうかどうか命だけはお助けを」

山賊たちに向けて、命乞いをする行商。全身ブルブルと震えて、

助かりたい一心で、山賊たちの前にひれ伏す。

「どうしやす、ボス」

「そっちは、金にならねえ。やっちまえ」

「へい」

「ひえええっ！」

ボスの命令に、山賊たちが手にした斧を構えた。

「フフフツ、素晴らしいな。ますます私好みの展開だ

いや、もう私と言う必要はない。

いいだろう。お前らまとめてボコボコにしてやる」

「プツ、プハハハ

お前、それ本気で言ってるのか。本当に、頭がどうかしてるぞ」

「この人数相手に、ボコボコだ？」

いいだろう。兄ちゃんの方をボコボコにしてやるぜ」

圧倒的優位をほこる山賊たちは、ゲタゲタと笑いながらラーベラムを見下していた。

「ふむ、この体は思っていたいじように素晴らしい。  
やはり女では、こうはいかないからな」

ラーベラムは自惚れていた。

ものすごく自惚れている。

ただし、彼の周囲には、苦しみもがく山賊たちが、うめき声を上げながら転がされていた。

「で、誰をボコボコにするって言ってたんだ？」

ゲシッ

ラーベラムは、倒した山賊のボスにとどめの一撃のように蹴りを入れる。

もう立ち上がれない人間に対して、手加減というものがない。

「グハッ」

「なんだだらしないな。

もう気絶したのか？」

やれやれ、何じゃくな奴らだ……いや、単に今の俺が強いだけか」

ニタリと笑い、ラーベラムは勝ち誇った。

だが、まだ彼は服を着ていない。

勝ち誇るなら、せめて、文明人として服をきてから勝ち誇っても

らいたいものである。

「な、なあ、あんた」

「ん？」

と、それまで怯えるだけだった行商が、ラーベラムに声をかけてきた。

「あんた、すごく強いんだな」

「ああ、俺も今それを確認したところだ。

今の俺は、かなり強いぞ」

「……」

やっぱり、頭がおかしい

ラーベラムに助けってもらった形になる行商だが、それにしても、変な男に助けられてしまったと思う。

「……ま、まあいい。助けてくれてありがとうな」

「今の間は何だ？」

もしかして、俺をおかしい奴だと思っただろうか？」

「へっ、そ、そんな、ことは、ないぞ」

「そんなに動揺して言うなよ。」

どうせごまかすなら、もっと堂々として嘘を言えよ」

堂々と嘘をつけというラーベラム。

「……」

この奇妙奇天烈すぎる青年に、行商は声を失ってしまった。

「ま、そんなことよりもだ？  
あんた服持ってないか？」

「服？」

「何に使うん……」

「だ」という言葉を口にする前に、今のラーベラムの姿を見れば一目瞭然だった。

「なるほど。そういうことか。」

命を助けてくれた恩人だ。

俺の服があるから、それぐらいならやるよ。」

「話が早くて助かるな」

話がまとまり、行商はラーベラムに、自らの着替えの服を渡した。だが、着替えて見てすぐ、ラーベラムは眉をゆがめて、不機嫌そうに言った。

「なんだこれは、プカプカだ。」

おまけに背丈が小さすぎる」

ラーベラムの体系と行商の体系は雲泥の差だった。

まるで亀の服を、鶴に着せようとするみたいに、全くサイズがあっていない。

「すまない、俺が今持つてるのは、それだけだ。」

それより、あの山賊の服ならどうだい？

背丈も結構にてるから、大丈夫じゃないか？」

「ヤダ」

せつかくの行商の提案だったが、ラーベラムは即答で拒絶した。

「誰があんな、臭い服を着れるか。」

あんな臭うのを着るなら、この服で我慢してやる」

「そ、そうかい」

なんだか難儀な男だな。

そう行商は思う。

しかし、行商がラーベラムのことを本当に難儀だと思つのは、ここからだつた

「ところでだ。

お前を助けてやったわけだから、これからお前は俺の従者になれ」

「はい!？」

……今、なんて言いました?」

ラーベラムの突然の言葉に、行商は我が耳を疑う。

「なんだ、頭の悪い男だな。

お前は俺の従者にしてやるぞ。

どうだ、このラーベラム様の手下になれるんだ。

感激してもいいんだぞ?」

当然のように言う、ラーベラム。

「ちょっと待て、俺が何でお前の手下なんかにならないといけないんだ!」

「ああ!

何を寝言を言ってる!俺のような天下第一の美人の手下になれるんだぞ。

どんな男だつて、イチコロ……って、今の俺は男だつたな」

自分が男であることを、なぜわざわざ口にしているのだろう。男は、まるで自分が女であるかのように勘違いしている。

「ああ、面倒だ！」

女の頃だったら、こんな面倒な間違いをせずに済んだのに」

誰か、この変態を何とかしてくれ！

お願いだから、助けて。

心の中で、切実に願う行商。

しかし、そんな行商の願いを聞いてくれる人は、ただの1人もいなかった。

「も、面倒だ。

お前は、今日からおれの手下。

いいか、絶対に逃げようなんて思うなよ

こうなりたくなければな」

キーン

倒れていた山賊の1人を、ラーベラムは手加減無用で蹴った。男にとつて非常に大事な部分を、手加減もせずだ。

気絶していた山賊が、その瞬間泡を噴き出した。意識を既に失っているとはいえ、この一撃は相当に強烈だったのだろう。

「てことで、今から帝都に行くぞ」

「ひー、俺はまだ手下になるなんて言っていないぞー」

行商が、そう叫んでラーベラムに抵抗するが、ラーベラムが容赦なく男の首根っこをつかんで離さない。ずるずると引きずられなが

ら、行商はラーベラムと共に、帝都を目指すことになった。

……なってしまった。

「もう、船なんて2度とのらねえ」

「ホッホッホ、もっとしゅきつとせんと行かんぞ」

ユフラス大河の旅を終え、アルとルートニックを乗せた船は、帝都近郊の都市に着いていた。

久々の大地に足をおろしたルートニックだったが、船酔い続きの旅で、げっそりとやせこけ元気がない。

「バイバイ、オジイサン。

元気でねー」

一方、アルは、これでお別れになる船の老い爺さんに向けて元気いっぱい、ブンブンと腕を降る。

船乗りのお爺さんは、ゆっくりと片手を上げて、そんなアルに別れの挨拶をした。

その後、ルートニックは街の安宿に行き、そこで宿泊の手続きを終わらせると、グッタリとペットに倒れ込んでしまった。

「俺、もうダメだ。

今日はもう動けない」

「ルートニック元気出してよ」

アルに励まされるルートニックだが、ちっとも元気は出ない。

ペットに倒れ込んだまま、すぐに寝息をたてはじめ、アルが揺すっても、鼻を詰まんでも、ほっぺたを引っ張っても、全く起きる気配がない。

「ムー、ルートニツクってば普通これだけすれば、起きるでしょう」  
疲れているという次元ではない、疲れのせいで、ルートニツクは全く起きなかった。

仕方なく、アルはどうしようかと考える。

窓を見ると、そこから見えるのは、アルが住んでいた辺境の村では考えられない、都市の光景が広がっていた。

「すごいなー。楽しそうだなー」

窓の下をのぞいてみると、そこにはアルと同じ年ぐらいの子供たちが集まって楽しそうに遊んでいる。

「いいなー。楽しそう。」

それに、ここってトカイっていうところだよな」

トカイという言葉を、村の大人たちから聞いたことのあるアル。建物がたくさん建っていて、人がたくさんいるところ。

それがアルの知っている『トカイ』なのだ。

意味はよく分かっていないが、アルの言っている言葉自体は間違っていないかった。

「……ルートニツク、僕遊んでくるから、ここで待っててね」

そう言い、アルは部屋から飛び出して行ってしまった。

だが、アルに好きなように扱われても、起きることのなかったル

ートニックだ。アルが部屋を出て行ったことにさえ気付かず、彼は深い眠りを貪り続けた。

「あれ？」

「ここ、どこだろう？」

「おかしいな？」

宿を飛び出して、アルが窓から見ていた子供たちが駆けて行った方に、アルも走っていた。

しかし、すぐにその方向が分からなくなり、引き返して歩いているうちに、いいにおいがしてきた。

おいしそうなお菓子を作っている店の傍で、涎を我慢しながらお菓子が焼かれる姿を見ていた。

砂糖と小麦を使ったお菓子で、焼いているうちに膨らんできいてい香りがする。

グー

少年の旺盛な胃袋は元気のいい音を出すものの、お金がないから見ているだけだ。

そのうちに、店の人に「そこにいると商売の邪魔だ」と邪険に追い払われてしまった。

「チエツ、けちだな。」

あんなにたくさんあるんだから、僕にだって暮れてもいいのに「

そう思うものの、結局お菓子は手に入らなかった。

仕方なく、トボトボ歩いていると、人通りの激しい場所にアルはきていた。

大人たちが行き交う場所で、背の低いアルには、大人たちにさえぎられて周りの様子が全く見えない。

あわてて、この場所から逃げようとしたが、すでに時遅く人ごみに流される形で、アルは全く知らない場所にまでやってきていた。

「あれ？」

「ここ、どこだろう？」

「おかしいな？」

そうして出てきた言葉がこれだ。

完全に、迷子になっていた。

とはいえ、このまま迷子でいるわけにはいかない。

アルは、もう人ごみの中はごめんだと、人のいない小さな通りに入り、迷路のようにいる組んだ袋小路を歩いた。

「おかしいなー。こっちの方だと思っただけど」

勘だけを頼りに歩いたものだから、アルはますます迷子になってしまった。

「ルートニック。

ねえ、どこにいるの？」

ついには、心ボサくなってしまう。

貧乏だが、唯一アルが頼りにできる人の名前を呼ぶ。

だが、宿屋で突っ伏しているルートニックに、その声が聞こえる

はずもない。

「ルートニツク、ルートニツク」

ついには大声を出して、アルは名前を連呼する。  
しかし、それでもルートニツクは来てくれない。

「うつつ、ええっ、どうしよう」

ついには大粒の涙をポロポロとこぼし、アルはその場で泣き始めてしまった。

ルートニツクが勝ってくれた、黒いオンボロローブを取って、エグエグと泣き続ける。

青い瞳と黄金の瞳からは、止まることなく涙が、こぼれ続けた。

ガサリッ

「ルートニツク」

音がした方をアルは見た。

しかし、そこにいたのはルートニツクではなかった。

「なんだ、ここは餓鬼の来るようなところじゃないぞ」

見るからに柄の良くない男だった。ギロリとした眼でアルを睨みつける。それだけで、子供のアルがいなくなるだろうと思ったのだが、おとの予想はずれた。

「お願い、ルートニツクを探してね。お願いだから」

「ああっ！？俺は餓鬼につかあうほど暇じゃねえんだよ」

ドンッ

男にしがみついて頼みこもつとしたアルを、男は足で蹴飛ばした。蹴飛ばされたアルは近くの建物の壁にぶつかり、小さな悲鳴を上げる。

「あうっ」

「まったく、餓鬼が……」

それだけで男は済ますつもりだった。だが、アルは再び男の服をつかんでいた。

「お願いだから、お願いだから、ルートニツクを探してよ。」

「ねえっ」

「てめえ、どうやら俺を怒らして絵みたいだな。餓鬼だからって、容赦しねえぞ」

男の気配が危険になった。

子供相手と思っていたが、アルのしつこさに、男の対してありもしない忍耐力がすぐに尽きてしまった。

腕を振り上げて、手加減なくその拳を振り降り降ろそうとする。

「！」

だが、住んでのところで男の腕は動きを止めた。

男の意思に反して、何者かが腕をつかんだからだ。

「誰だ、お前!？」

男は、自分の腕をつかんだ人物に睨みを利かせた。  
その男は、金髪碧眼の、美青年。その表情には、不遜な様子を浮かべていた。

「ふっ、俺の名をたずねるとは、いい度胸だ。  
たかだか、街のゴロツキ程度が……」

ブンッ

「おっと危ない。  
人がしゃべってるところでいきなり殴りかかるなんて、ひどい奴  
だな」

「うるさい！  
お前、なんだか分からないが無茶苦茶腹が立つ！」

突然切れる男。

それに対して、金髪の青年は言い放った。

「なんだ、お前。俺の美貌に嫉妬して腹が立ったのか？  
だが残念だな。

牛ガエルがどんなに鳴いたところで、しょせん醜い姿であること  
に変わらない。

嘆くんだったら、そんな姿に生まれた、自分自身の運命を恨むん  
だな」

ブチッ

男が完全に切れた。  
物騒な目をして、刃物を取り出す。

「ぶっ殺す！」

「クク、この俺をやるとはいい度胸だ」

男は物騒に、金髪の青年は楽しそうに言った。

山賊に襲われていた時、ラーベラムに助けられた行商の名前をアントンと言う。

彼の命は、ラーベラムに助けられたことで助かった。

だが、その後の彼の運命は大きく変わってしまった。

少なくとも、当人はそのように思っていた。

なにしろ、ラーベラムは帝都を目指すと言いながら、一番初めにたどり着いた町で、一番いい服を選び、その代金をアントンに無理やり出させた。

次に帝都に向かうために、ユフラス大河を行く大型船に乗ったのだが、その船賃もアントンが出したのだ。

ラーベラムは、一等の船室を要求したが、そんな金は、アントンにはない。

「なんだと、この俺にただの庶民と同じ部屋で、寝ろだと！」

絶対に許さん！」

そう意気込んだラーベラムは、船の乗組員に突っかかり、乱闘騒ぎまで引き起こした。

腕っ節の強いラーベラムであるが、船中の乗組員相手に、勝てるはずもなく、行き場がなくなって、ついに船から飛び降りて逃げ出す有様だった。

その時、アントンはこの厄介すぎる青年から逃げ出したかったの

だが、時陽院の1人がアントンをラーベラムの連れ人だということ  
を覚えていた。

いきり立つ船員たちに囲まれ、

「この乱闘騒ぎの責任をとれ。

弁償してもらうからな。

……何、金がないだと！

だったら、役所に付きだしてやる！」

いきり立つ船員たちから逃げるために、アントンも仕方なく、ラ  
ーベラムと同じく、船から飛び降りるしかなかった。

だが、これでラーベラムとはお別れだ。

川に飛び込んだ後は、ラーベラムと離れ離れになったのだ。

これで一安心。

そう思ったものの、次にたどり着いた街で、平然とラーベラムが  
お茶を飲んでいた。

何やら妙齢の美女相手に、楽しく話し込んでいたのだが、その彼  
が目ざとくもアントンの姿を認めたのだ。

お茶を楽しんでいたラーベラムは、コイコイと指で合図してくる。  
だが、アントンは急いで逃げだすことにした。

「この男に関わっては、ダメだ。

もういやだ。

絶対に関わらない。

あんなにかれた男はごめんだ！」

心の中で絶叫し、アントンは逃げたのだ。

幸い、ラーベラムはアントンが逃げ出した後も、美女とのお茶をのんびりと続けていた。

これで全て終わった。

めでたしめでたし……

「よっ」

次の街にたどり着くよりも早く、ラーベラムは街道上でアントンに追いついていた。しかも、あとから追ってきたであるうラーベラムの方が、涼しい顔をして、アントンがやってくるのをのんびりと待っていたのだ。

「どうして、お前が俺より先にいるんだ!？」

「それが、さっきの女性が場所で隣町まで行くつもんだから、途中まで同行させてもらってね」

「……」

にこりと微笑するラーベラムの顔は、なんともすがすがしそうだった。とても気持ちのいい顔をする、この男の顔は、そこだけ見れば天使の笑みだ。

確かに、真黒な尻尾が生えている、邪悪な天使の笑顔だが……。

その後、捕まってしまったアントンはラーベラムの言われるがままに、帝都近隣の街にまで旅を続けた。

「この街はよく知っているんだ。なんたって、昔の俺が作り始めた街だからな」

ラーベラムはそう言った。

「何を言ってる。

この街はリューション帝国の建国の時代に作られた街だ。今から300年以上も昔の、『俺』って、一体どういう意味だ？でも、こいつは見た目がまともでも、頭はおかしいから、これぐらの言動はちっともおかしい部類に入らないぞ」

ラーベラムと旅する間に、すっかり鳴らされてしまったアントンは、そのように心の中で思った。

もちろん、口に出してこんなことを言うわけではないが。

だが、自称この街を作った男は、簡単に迷ってしまった。

「おかしいな。

ここはどこだ？

この俺の勘が間違っているのか？」

勘と言っていると、もう絶望的だった。

「……なあ、アントン。

お前ならこの街の道、知ってるよな」

ついに諦めたラーベラムは、あっさりと同行者のアントンに、道案内を頼んだ。

「俺はこの街に来たことがないんだ。

そんなの分かるわけないだろう」

「へっ？

それは困ったな」

今までふてぶてしい様子を崩さなかったラーベラムが、このとき初めて間抜けな顔をした。

「しかたない。」

「じゃあ俺の勘を、頼りにするか」

人に道を聞きもせずに、その後アントンとラーベラムの2人は、散々道に迷った挙句、どことも知れない袋小路に迷い込んでいた。

「おつ、ようやく探し物みつけ！」

と、それまでただの迷子と思っていたラーベラムが、そんなことを口にした。

突然走りだすラーベラム。

「おい、どこに行くんだ！」

走り出すラーベラムの後をアントンは追う。建物が乱立する道のため、すぐにラーベラムの姿を見失ってしまった。

「ハアツ、本当に自分勝手なやつだ。」

なんて困った奴なんだ」

そのため息を口にしたアントン。

「だが、もしかしてこれは逃げるチャンスか？」

だが、ラーベラムが勝手に走っていなくなったのだから、これ幸いにアントンは逃げ出すことにした。

とはいえ、街の複雑に入り組んだ袋小路の中にいるために、簡単に抜け出すことができない。

小路のところどころには、まずしい貧民が群れていたりと、明らかに犯罪と関わりのある人間たちの姿がある。

ラーベラムの財布代わりにされたせいで、ほとんどすつからかんの財布しか持っていない、アントンだったがねそれでも全財産を取られては困る。

犯罪者にしても、金のない貧民にしても、どっちかに襲われては困る。

アントンは小心者なのだ。

その結果、袋小路の道を、さらに人がいない場所だけを選んで進んだ。その結果、アントンは見てしまった。

刃物を振り回している男を、簡単にのってしまったラーベラムの姿を。

「おい、俺は逃げてたのに、どうしてこうなるんだ……」

己の不運を呪うアントン。

そんなアントンに、こっちにこいと指で仕草をするラーベラム。

「トホホ、しかももう見つかったるし」

泣きたくなるアントンだった。

迷子になって、ゴロツキに襲われかけていたアルを助けたのは、金髪碧眼の青年だった。

あつという間に、ゴロツキを倒した男は余裕の表情……と言いたかったが、右頬を摩りながら、不貞腐れていた。

「畜生、まさかこんなザコに一発もらうとはな。

やっぱり、生まれたばかりだから、こんなものか？」

よく分からない言葉を口にする。

「……」

そして、その青年の傍に、無言の男がやってきた。

なぜだか、その顔はげっそりと疲れ果てていた。その顔はアルが知っている中では、ルートニックがペットに倒れ込んだ時の顔に、そっくりだ。

「助けてくれてありがとう」

アルは、そう言ってゴロツキから助けしてくれた金髪の青年に感謝した。

「ああ、いい響きだ。

いいね、こういう純真な少年の感謝というものは、百万の賛否に

も勝る荣誉だ。

「もつとも、乙女のキスには、及ばぬがな」

「……」

「……」

アルと、金髪の青年の付き人らしい人物は、黙り込んでしまった。アルには、どう返したらいいのか分からない。

一方、付き人の男は、もはや何を言っても無駄だと悟りきっているから、無言だ。

「変なおじさん」

結局、青年に対してアルが言った言葉はそれだった。

「……お前、前にも俺のことを、『変なおばさん』って言ったよな」

青年が押し殺した声で言う。

「えっ？」

どうして？

僕、オジサンに会ったのは、初めてだよ？」

不思議そうに話すアルだが、青年は不機嫌な顔をやめなかった。

「どうしてなんだ。」

どうして、子供ってやつは、こつも純粹で、残酷なんだ」

そんなことをブツブツという。

なんだか、アルがどこかで一度聞いたようなことと似ている。

「あれ？」

おかしいな、オジサンによく似た人を、僕知ってる」

「当たり前だろう。」

「なんたって俺はラーベラムだからな」

「ラーベラム」

「そう……」

「この声だと分かるだろう」

いきなり、目の前のラーベラムと名乗った青年の聲が、女性の者に変わった。

それは、アルが知っている、淡い一人と共に消えてしまった、女性のラーベラムの声だった。

「へっ？」

その声は、ラーベラム」

「お前、そんな特技まであったのか、とことん変態だ……」

女性のラーベラムの声を知っていたアルは驚く。

一方、この場にいるアントンは、女性のラーベラムのことを知らない。自然、この場にいるラーベラムが出した女性の声に、変態であることをますます強烈に意識せざるを得なかった。

「アントン、お前いい度胸してるな」

「プツ、プクククツ」

不機嫌な顔のラーベラム。でも、声がさっきの女性のままだ。もしも声だけ聞けば、その美声に思わずうっとりしたことだろう。だが、男が目の前で出しているのでは、もう笑うしかない。

「ワハハハ、ワハハハハ、ヒー、面白い。ワハハハハハ」

「……」

笑いまくるアントンは、ついにその場に立っていられなくなったのか、地面に膝まで着いてゲラゲラと笑い続ける。

「俺としたことが、なんて無様な……」

こいつに、女性のラーベラムの声を聞かせるんじゃないか。そう思う、ラーベラムだったが、もう手遅れでしかなかった。

「アントン、お前は今日の宿でも探してろ」

それだけ言つて、笑い転げるアントンを放り出して、ラーベラムはアルを連れて歩き始めた。

「ねえ、いいの。あのおじさんまだ笑い続けてるけど」  
「ワハハハハ」

アントンの止まらない笑いが続いている。地面に向かつて、拳をバシバシと叩き続けているから、完全につぼに入ってしまったのだ。

「いいか、アル。」

あいつはここにはいない。

いいな、そう思え！」

「えっ、でも無視したら可哀そうだよ」

「お前つて、いい奴だな。」

でも、いい奴だったら、俺の頼みを聞いてくれ」

「ええっ、ヤダ！」

「チィッ」

あっさりアルに拒絶されて、ラーベラムは舌打ちした。

「ところでアル。少し言いか」

「何？」

ラーベラムの手が、アルの左目の上を通り過ぎた。

「なんでもない」

「変な、ラーベラム。」

「ねえ、本当にオジサンはラーベラムなんだよね？」

アルの言うラーベラム。そして、淡い光となって消えてしまった、ラーベラムのことだ。

「ああ安心しろ。」

「俺は間違いなく、あのラーベラムだぞ。」

「いや、正確にはだったと言っべきだな」

「だった？」

「……小さいが、お前は俺の契約者だ。」

「だから、お前にだけこの秘密を教えてやる」

「でも、絶対に誰にも言っなよ」

「うん、分かった」

「本当に、誓えるな？」

「僕、男だよ。」

「男同士の秘密は絶対にしゃべっちゃ行けないんだよ」

フッ

アルが胸にドンと手を当てる様子を見て、ラーベラムは笑った。

「昔、そんな風にして誓った男がいるよ。」

「グラガレスっていう、髭面のオッサンがな」

「そっ口にする、ラーベラム。」

「青い眼が、どこか遠い昔を見つめるようで、青年の彼にはひどく」

似つかわしくない憂愁の色を帯びている。

「グラガレス……それって、確かこの国を作った人の名前だよね」

「おっ、アルは小さいのに、よく知っているな」

「うん、僕のお父さんが教えてくれたよ」

「そうか」

アルを褒めるラーベラム。

その表情は純粹に嬉しさを表していて、アントンの知るあのふてぶてしいラーベラムと、とても同一人物の表情に見えなかった。

「いいか、アル。」

俺は人間じゃない」

「オバサンのラーベラムもそう言ってたよ」

「……」

「……違った、お姉さんって言わないといけないんだった」

「よろしい」

男の姿をしたラーベラムだが、些細なことを気にしているようだ。だが、すぐにそんな様子も改める。

「いいか、俺は人間ではない。」

前のラーベラムだった時もね人間じゃなかった。

俺はな、生きていくためには人間と契約を交わさないといけないんだ」

「ケイヤク？」

「そう、契約。」

人間と約束をする。

そうしないと、俺は……ラーベラムという精霊は生きることができない宿命を持っているんだ」

「ラーベラムは、約束をしないと生きていけないセイレイなんだ。だから、お姉さんだったラーベラムは消えてしんじゃったんだね」  
「いや、ちゃんとあのラーベラムは生きている。」

「ただしな、ラーベラムは人間と契約を結ぶと、その時から、姿と人格がが変わるようになってるんだ」

「よく、分からないよ?」

「今はいいさ。」

「もう少し大人になれば、俺の言う意味が少しは分かるようになるだろう。」

「ただ、俺はこの前のラーベラムの、生まれ変わりみたいなものなのさ。」

「もちろん、お前のことはちゃんと覚えている。」

「そして、今まで生き続けてきたラーベラムの記憶全てを覚えていく」

「そう言いラーベラムの視線は、深い憂愁の色を深くしていく。」

「いいか、アル。」

「ひとつだけ守ってくれ。」

「お前は、死ぬな。」

「お前が死ねば、契約者を失った俺も、死んでしまっからな」  
「わかった。」

「僕、ラーベラムの言うことはよく分からないけど。」

「でも、約束なら、ちゃんと守るから」

「そう言い、アルはラーベラムの顔を見た。」

「ラーベラムも小さなアルの顔を見る。」

「その瞳には、まるで女性の頃のラーベラムのような色が宿っていた。女性の、母のような穏やかで、暖かな瞳をしたラーベラムが、そこにはいた。」



「おい、そこのお前！」

ラーベラムとの話が終わった直後だった。

突然、アルとラーベラムの2人は、突然兵士に呼びとめられた。

「うん？」

「違う、お前ではない。

そっちの老母をきている少年」

「僕ですか？」

「そうだ。黒いローブの少年を探している。

もしかしたらお前かもしれないので、我々と同行してもらおう」

いきなり呼びとめてきた兵士は居丈高に言い放つ。

「おいおい、黒いローブをきている子供なんて珍しく……いや、や

っぱこんなダサイローブ着てる奴なんて、珍しいわ」

「ラーベラム、ヒドイよ。

僕だってこれ、好きで来てるわけじゃないんだよ」

「だろうな。

そんなのを好んできてるんだったら、俺はお前の服装のセンスを  
疑っぞ」

「お前たち、静かにしろ！」

無視して2人だけで話すものだから、兵士が誰何の声を上げる。

「おっ、すまんすまん」

と、たいて悪びれた様子もなく謝るラーベラム。

「ごめんない」

一方のアルには、少年ながらも素直に謝った。

「いいか、お前には私たちの命令を拒むことなどできないからな」

兵士がそう言うと、その背後からぞろぞろと兵士たちの大群が現れた。皆、武骨な鉄の鎧に、長い槍をもって武装している。

こんな大勢の兵士を見たことのないアルは、兵士たちの威圧するような雰囲気には怯え、片手がラーベラムの服をギュツとつかむ。

「なあ、あたらんら子供1人に何もこんな大勢で出張る必要はないだろっ」

「お前には関係のない話だ。」

さっ。その子供、こっちに來なさい」

「イヤだ！」

兵士は穩便に話しかけたものの、アルが大きな声で拒絶した。

「……捕まえる」

だが、兵士たちは少年相手に手加減をするつもりがないらしい。兵士たちは武器こそ構えないが、アルに手をかけようとした。

「お前ら、礼儀ってものがなっていないな」

そんな兵士たちの姿に、ラーベラムが不満を表す。

「なんだお前、まさか我々に楯突く気か？  
我らはリヤーシャン帝国を守護する……」

ドガッ

居丈高に語るうとした、兵士たちの隊長にラーベラムの拳が命中した。

ドカリと隊長が地面に倒れる間、兵士たちは突然の出来事に身動きもできない。

まさか、目の前にいるラーベラムが、この人数相手に反抗してくるなど、思ってもいなかったのだ。

「アル、全力で逃げるぞ」

「えっ、わ、分かった！」

ラーベラムがアルの片手をつかんで、その場から全力で逃げ始める。山賊を相手にしていた時は、数で勝る相手にあっさりと勝ったラーベラムだが、さすがに兵士たちのやり合うつもりはない。

「お、追え！」

あの2人を逃がすな！」

逃げる2人を慌てて兵士たちが追いかけ始めた。

そんな逃げる中で、アルは一つ確かめる。

「ねえ、ラーベラム。」

逃げるなら、殴らなくてもことよかったんじゃない？」

「ああ、俺もそう思う。」

だが、どうも体が正直過ぎて困るな

ハハハハハ

「ええー！」

笑ってる場合じゃないよ、ラーベラム」

「何言ってるんだ。」

「こういうヤバイ時ほど、面白くなるもんだろっ」

「うわーん、ラーベラムのバカ。」

僕たちきつと兵士に捕まったら、ただじゃすまないよ!」

不適に笑ってみせるラーベラムに、悲鳴を上げるアル。

なんだか、とんでもない人に出会ってしまったなと思うアル。この前の女性の時のラーベラムは、こんな性格じゃなかったのに、今のラーベラムはヒドイ。

若い少年は、そう心に思うのだった。

「ヤバツ！行き止まりかよ」  
「ラーベラム、後から兵士たちがくるよ」

全力で逃げだしたラーベラムたちだったが、運悪く袋小路の行き止まりに出くわしてしまった。

高層の建物が道をふさいでいて、飛び越えられるはずもない。後からはすでに、鎧をガチャガチャとならす兵士たちが追いついてきた。

兵士たちが怖い顔をして、ラーベラムを睨む。

それに対して、ラーベラムは不遜な表情で答えて見せる。まるで、「お前たちなんてなんともない」と、言い張っているかのような、ふてぶてしい姿だ。

とはいえ、心の中では余裕をかましていられない。

武器を持った兵士に抵抗すれば、山賊の時のように切り抜けるられるほど、今の自分が強いとは思っていないのだ。

「参ったな。」

せめて、もう少しのこの体に慣れてたら、これぐらいの数なんとかなるんだけどな」

そう愚痴る。

まだ前のラーベラムから、今のラーベラムに生まれ変わって、ひと月もたっていない。

今の体を自分の意思どおりに完全に動かすには、まだ体に慣れるための時間が必要だった。

「さあ、痛い目に遭いたくなかったら、観念することだな。

もつとも隊長をぶん殴ったお前は、タダで返すわけにはいかないが」

「へー、ただじゃないってことは、何かいいものでもくれるのかな？」

「ああやるとも、その顔にこいつをな！」

そう言い放ち、兵士の1人が拳をラーベラムにお見舞いしてきた。

「おっと」

だがねそれを簡単に避けて、懐に強烈な拳をお見舞い……

ガンッ

「イデエッ！」

「ワハハ、バカかお前。

鉄の鎧に素手で殴りかかるなんて、お前バカだろう」

「うるせえ、こっちだって体が勝手に動くんだから仕方ないだろう！」

勝手に動く体のせいにして、自分の落ち度を認めないラーベラム。

「ラーベラム、大ピンチだよ！」

「クッ」

兵士たちに取り囲まれ、もはやこれまでという状態だ。

「これは参った、降参だ」

ついに勝てる要素なしと見てとり、ラーベラムは両手を上げて降参した。

「そうだ始めから、そうやれば痛い目を見ずに済んだのにな」

ドカツ

兵士の拳が、無防備になっていたラーベラムの腹に命中した。強烈な一撃に、口から息が漏れ、その場に膝を折るラーベラム。

「ラーベラム！」

慌てて、アルが駆け寄る。

「それ以上、ラーベラムにヒドイことをするな！」

ラーベラムと兵士たちの間に、両腕を広げたアルが立ちふさがった。

「おいおい坊や。

ヒドイことつて言うが、そいつが先に、俺たちの隊長をひどい目に合わせたんだぞ。

これは正当な罰つてもんだぜ」

「それでも、ラーベラムにひどいことをするな！」

少年とは思えない、強い口調でアルが制止する。

だが、兵士たちはそんな少年を相手にしなかった。

「まったく、そっちの金髪もとんでもない男だが、ガキの方も、俺たちに刃向うみたいだな」

「どうする。」

「こいつも黙らせるか？」

兵士たちは、今度はアルに暴力を振るおうとする。

ガチャッ

兵士の1人が一歩あるの方へと近づいてきた。

「来るな！」

アルが兵士を制止するが、兵士はまた1歩前進してアルに近づく。勝てる見込みのない相手を前に、それでも両腕でラーベラムを庇おうとするアル。

だが、兵士はそのアルにまで、暴力を下そうとしているのだ。

「それ以上来るんだったら……」

近づく兵士に、アルは怯えながらも動かない。

だが、その時背後にいたラーベラムが、そつと立ち上がった。

「ラーベラム、立っっちゃダメだよ」

さっき腹にもらった一撃のために、やや顔色の悪いラーベラム。よほど強烈な一撃だったのか、足取りもややおぼつかない様子だ。

「やれやれ、この俺が子供にかばわれるとはな……」。

だが、お前の覚悟はたいしたものだ、褒めてやるぜアル……いやアルフォード」

アルを本名で呼ぶラーベラム。

そして、不遜な表情になり、にやりと笑った。

「それでこそ、俺の契約者だ」

そう言い放つ。

そしてラーベラムは、詰め寄る兵士の1人をにらみつけた。

その視線があまりにも鋭く、兵士は本能的な畏怖を覚えた。足が一步後退してしまおう。

後退してしまったことに気づいて、兵士は慌てて叫んだ。

「な、なんだ！

お前みたいな奴が！」

言っている意味は兵士にも分かっていない。ただ、自分の感じた恐怖を振り払うために叫ぶと、ラーベラム目がけて殴りかかろうとした。

(やれやれ、参ったな。

はったりをかましたはいいが、ヒドイ目にあいそうだ)

威圧こそしたものの、ラーベラムには勝さんなんて全くなかった。ただこのまま兵士に捕まるぐらいだったら、やられる前にやれるだけ殴り倒してやる。

そう思っていたのだ。

ラーベラムはすでに8人もの兵士を殴り倒していた。

相当なつわものぶりを見せるが、兵士たちからの反撃も受けていない。顔にはいくつもの殴打を受けていて、そこら中が赤くはれていた。

美形の顔も、不遜な表情も、こうなつてしまえば、もはや意味がない。

ただ、「あと2人は道連れにしてやる」とか何とか、心の中で強烈に念じていた。

別に刺すや刺されるの戦いではないが、考えていることはそれに近いものがある。

一方の、アルはというと、兵士の1人に捕まっていた。ただし、その腕から逃げようと、捕まえられた兵士の腕にかみついたり、暴れたりして必死に抵抗している。

ただし、鉄で守られた兵士の鎧に噛みついてても、全く歯が立たない。

「暴れるな！」

とはいえ、腕の中で暴れるアルには、兵士も手を焼く用で、アルの頭を小突いた。

始めは弱かったが、アルが抵抗をやめないなので、次に襲った一撃は強烈だった。

目の前に火花が散って、星がクルクルと回る。

「ま、まだ、僕は捕まらないぞー」

と声は出すものの、もはや暴れるだけの力もなくなってしまうた。腕の中で、グツタリとして動かなくなるある。

「お前たち、そこまでにしろ」

だが、そんな乱闘が繰り広げられていた状況に、声が響いた。その声は、全員の動きを止めるのに有効だった。

「どうした。」

俺に恐れをなしたか？」

とはいえ、ラーベラム1人は元気なものだ。ボロボロの状態なのに、強気に言い放つ。全く、いい根性をした男である。

だが、兵士たちはもうこれ以上ラーベラムに襲いかかってこようとはしなかった。

代わりに、おお慌てで、槍を手にして、整列する。

「まったく、リニューシヤンの兵士ともあるうものが、男1人と、子供相手に乱闘とはなんたる無様だ！」

一喝する声に、兵士たちは恐縮するように身を縮めた。そして、その声を出していた男が、ラーベラムの前に姿を現す。

「あんたは、こいつらの上官か何かか？」

「まあ、そんなところだ。」

ところで、その子供は私の連れだ。

お前がだれかは知らんが、私の保護している子供に手を出さないでもらおう」

ラーベラムの前に立ちはだかる男はそう言った。

「保護者……ああ、そうか。」

お前が、ルートニックだな」

「なぜ、私の名前を知っている」

「俺の目が……」

と、そこまで言いかけて、ラーベラムは口をつぐんだ。

(俺の目がお前を見ていたからだ)

アルの左目の黄金の瞳を通して、ラーベラムはアルが見ているものを見ることができなのだ。

それに微かにだけ、気配や音だって伝わってくる。

人でないが故に持つ、精霊ラーベラムの力だった。

だが、そんなことをルートニックにいちいち説明するつもりはラーベラムにない。第一、自分の正体を、アル以外の人間にわざわざ知らせるつもりもなかった。

「……俺は、アルの兄のラーベラムだ。」

偶然この街でアルを見つけて、それであんなのことを聞いたんだ

「よ

……アルの兄だと？」

だが、そんなことを私はアルから聞いてないぞ」

「そうかい。」

だが、俺が兄貴だってことは、アルがちゃんと証明してくれるぜ。

な、アル」

と、兵士に捕まっているアルの方にラーベラムが視線を転じた。だが、兵士に強く頭を小突かれたアルは、兵士の腕の中で、グツタリと動かなくなっていた。

「……」

「……気を失っているな」

「あちゃー、誰だよ。」

アルを気絶させたバカは」

バカ呼ばわりされた兵士が、縮こまる。

ラーベラムにバカと呼ばれるのは一向に構わないが、ルートニックが誰何の視線を向けてきたために、兵士は縮こまってしまったのだ。

「まあ、いずれにしろアルの意識が戻れば、お前の正体も分かるだろう。」

だが、お前が何者にしても、この責任は取ってもらうからな」  
「責任？」

ルートニックの言葉に、眉をひそめるラーベラム。

その周囲に彼が倒した兵士たちが、無言で転がっていた。

「……」

「とりあえず、牢に放り込んでおけ。」

「ハッ」

ルートニックが命令すると、兵士たちがラーベラムを両方から抑えかかった。今度ばかりは、ラーベラムも抵抗しなかった。

19

「いつツ、ウツ！」

牢屋に放り込まれてしまったラーベラムは、兵士たちに殴られた顔を押えながら、悲鳴を上げた。

アルとはルートニックによって引き離され、1人牢の中にいる。

「あーあ、俺としたことがこんなへまをやらかすなんてね……」

だが、なかなか楽しかったな。

こんなに大暴れするのは、何十年ぶりかな？」

そう言い、昔の自分を懐古する。

この男のラーベラムの姿になる前は、女の姿をしていた。その時の性格は、今のラーベラムとは180度反対と言ってよく、清楚で清らか。普段は大人しく、物静かにしている女性だった。

そして美声の歌姫として知られていた。

間違っても、喧嘩なんてしたことがない。

「うん、あれは稀に見る美女だったぞ。

さすがは俺だ」

と、自我自賛。

「ただ、その前は老婆だったからな」

さらに前のラーベラムになると、70過ぎの老婆だった。

ラーベラムは、人間との契約を結ぶ度に、自分の姿と人格が変わってしまふ。昔の記憶は引き継がれるものの、性格が変わってしまふと、昔の人格とは、やることなすことが全く別物になっしまふ。

そして、老婆だったころのラーベラムは、80過ぎの老人と契約を結んでいた。

どっちも高齢者で、毎日「腰が痛い、膝が痛い」と言いながら、互いに介抱しながら生活する有様だ。

当然、喧嘩どころの話ではない。

こけただけで、膝の骨が折れたことがあるから、歩くだけで命がけだった。

「ま、そんなこともあったな」

と、さすがに老婆の頃の自分を、称賛する気にはなれないラーベラムだった。

ガチャッ

っと、ラーベラムが過去のことを振り返っていると、牢屋のドアが開かれた。

「お前に話がある」  
「話ねえ」

牢の檻ごしに、ルートニックがラーベラムと対峙した。

「もしかして、聞きたいのはアルのことか？」  
「そうだ。」

あの少年の左目は、黄金色の瞳をしていた。  
あんな色をした人間は俺は今までに聞いたことはない。

「……ただ伝説の話に出てくる、大帝以外にはな」  
「……」

ルートニツクは意味ありげに問いかけてくる。

だが、それに対してラーベラムは黙ったまま続きを待つ。

「私はあの少年の瞳の正体が知りたく、家族の元を訪ねたが、残念ながら、先日の大洪水でアルの村は壊滅状態だった。

おそらくは、彼の家族は……」

「そうか……」

と、そこで初めてラーベラムは、暗い色の表情を見せた。

(……本当に、アルの兄なのか?)

ラーベラムの様子が暗くなるのを見て、ルートニツクは心の中で  
そう思う。

もしもアルと関係がなければ、ラーベラムがこのように暗くなる  
はずはない。関係のない人間を失ったならば、ここまで暗い表情を  
するはずがないからだ。

そして、ラーベラムをアルの兄だと、まだ信じていないルートニ  
ツクは、この話を切り出しても、ラーベラムが普通にやり過すだ  
けだと思っていた。

だから、彼には、ラーベラムがアルの兄であるように思えてきた  
のだ。

「それは残念だ。

あの村も、家族もいなくなってしまうたのか……」

ラーベラムは、そう言っただけで暗く残念がる。

「……お前、本当にアルの兄なのか？」

「ルートニック、だから何度も言ってるだろう。俺はアルの正真正銘の兄だぞ」

本当のことではないのだが、あくまでも兄と言いつけるラーベラム。

「いいだろう。」

では、お前を兄と考えるとやるが、なぜおまえはあの村にいなかった？

「疑ってるのかい？」

「てことは、まだアルは木を取り戻してないのか？」

「ああ。」

それより、俺の質問に答えてもらおう」

「……あの時は、たまたま仕事で村を留守にしていただけだ。」

俺、こう見えても、この前まで街を回って、行商しながら芸を見せて回ってたんだ」

芸を見せていた……女性だったころのラーベラムは、契約者と共に歌姫として、各地を旅しながら生活をしてきたから嘘ではないのだ。

「それに行商の仲間で、アントンって男が今この街にいるんだ。」

俺はそいつの話に乗って、この街まで来ていたんだ。

そしたら、偶然街にいたアルを見つけたわけ」

「偶然……ねえ」

「そう、偶然」

にこりと笑ってみせるラーベラム。まるで、僕は善人です、この笑顔を見ればわかるでしょうと、言いたげだ。

「いつっ！」

ただし、彼ご自慢の美貌も、現在は腫れあがった顔のせいで、全く意味をなさない。

それどころか、笑った拍子に傷が痛む。

「ただの行商が……兵士に手を出した揚句に、乱闘ねえ」

「ハハハ、つい手が出ちまって。」

だって、あいつらときたら、いきなり俺の大事なアルに手を出そうとしたんだぜ。

そういえば、アルを探すように命令したのは、あんた何だってな？

あんた、何者だ？

「……私は巡察士だ」

「巡察士？」

巡察士って言えば、帝国の各地を秘密裏に調べて回って、各地の役人の不正や悪行を皇帝陛下に報告する、巡察士のことかい？

「……」

「マジッ、てことはあんた、皇帝陛下の直属なのか！」

「……やけに、巡察士について詳しいな」

「ああ、だって昔の俺がつく……」

「た」という言葉を、ラーベラムは慌てて飲み込む。

(いけねえ、どうも、今回の俺は口と体が正直すぎるな)と、心の中で反省するラーベラム。

「まさか、巡察士の制度を作ったなんて言うつもりか？」

「アハハ、まさかバカ言うなよ。」

巡察士の制度って言えば建国時代に作られた制度だぜ。

そんな時代に、俺が生きてるわけないだろう

ワハハハハ……」

(そうだけ、今の姿の俺は、生きてないぞ。

もっとも、あの頃は別の姿をして生きてはいたがな……)

と、ラーベラムの心の声だ。

そんな慌てて取り繕うラーベラムの姿を、ルートニックは胡散臭げに見る。

「でも、あんたが巡察士だってんなら納得できた。

道理で、この街の兵士たちに命令できるわけだ。

でも、どうせだったら、兵士にアルを丁重に連れてくるように命

令しておけよ」

「私は、そう命令していた。

少なくとも、私の目のにいる君が暴れなければな」

「あちゃー、もしかして、俺っていらぬことをしたわけ」

「そうなるな」

反省の色を見せるラーベラム。

あの時余計なことをしなかったら、アルはあんな目にあわずにすんだわけだ。そう思えば、なんだかアルに申し訳ない気もする。

ついでに、自分がボコボコにされることもなかったが、その辺は、何十年振りかに『ヤンチャ』をすることができたので、特に気にしていなかったりする。

ギー

と、話し込んでいたところで、再び牢屋のドアが開いた。

「ねえ、ルートニック、ラーベラム」

ドアから出てきたのは、アルだった。

20

「ねえ、ルートニック、ラーベラム」

ドアを開けて出てきたアルは、2人の姿を見た。

20

「アル、お前どうしてここに！」

「兵士の人に聞いて、2人がここにいて聞いてたの」

ルートニックの問いに、アルが答える。

「ねえ、ルートニック。

ラーベラムは悪いことをしたんじゃないんだ。

僕を守ってくれようとしただけなんだ。

だから、お願いだから、牢屋から出してあげて」

と、アルが願い出てきた。

「お前……！」

アルの願いに、答えようとしたルートニックだったが、その言葉  
がつまり、表情が驚きに変わる。

「お前、どうした！」

「左目が青いぞ!？」

「えっ、僕の左目が青い？」

黄金の色をしていたアルの瞳が、右目と同じ青い色に戻っていた。その様をみて、ルートニツクは驚いた。黄金樹の瞳かもしれない人間の目が、ただの青い色に戻ってしまったのだから、驚かすにはいられない。

「おかしいな……僕の左目は……」

「おーと、何言ってるんだ！

ルートニツクのおっさん」

「おっ、おっさん！」

突然、おっさん呼ばわりされて、別の驚きに包まれるルートニツク。

俺はまだお兄さん。

などと、少年のアル相手に言って他ぐらいだから、オッサンとい言われて、衝撃を受けたのだろう。

「おっさん、アルの左目が、金色なんてバカなこと言っちゃいけないぜ。」

こいつの眼は両方とも生まれたときから、青い色だけ」

「そんなバカな、確かに青かったぞ」

「そうだよ、ラーベラム。」

僕、確かに金色……」

「はあっ？

お前何バカ言ってるんだ？

青い目が、金色になるなんて、そんなバカな話があるわけないだろう。

どうせ寝ぼけて、夢でも見てたんじゃないのか？」

胡散臭げに言う、ラーベラム。

そして、ルートニックに向かっても言い放つ。

「オッサン、何を勘違いしているのかは知らないけど、俺の弟は変な色の目をしてないぜ」

「だが、私は確かに見たのだ。」

金色の瞳を。

黄金樹の瞳かもしれない、目の色を……」

「はあっ？」

どうやら、おっさんもアルと同じで、寝ぼけてるみたいだな。

見てみるよ、こいつの眼は青い色だぜ」

ラーベラムに言われて、もう一度アルの左目を見るルートニック。だが、アルの瞳は見間違えるはずもなく、青色をしていた。

「おかしい、確かに黄金の色だったはず……」

と、納得のいかないルートニック。

「まったく、その歳でボケるなんて、困ったもんだな」

一方のラーベラムは、これでとどめとばかりに言い放つ。

「そうだ。そんなに疑うなら、あのとときの兵士たちに聞いてみたらどうだ。」

目の色が金色の子供だったら、兵士たちも覚えているはずだろう。うっ、うむ。確かにそうだが……」

納得できない様子のルートニックではあるが、結局ラーベラムにいいように言いくるめられて、兵士たちに、アルの瞳の色を聞き出すために牢を出て行った。

2人だけになると、ラーベラムはアルにこっちに来いと手で合図する。

「ラーベラム、ゴメンね、僕のせいで捕まっただよな」

「なーに、安心しろ。」

別にこんなの初めてじゃないから、俺は全然平気だ」

「そうなの」

「ああ、もちろんだ。」

それより、お前の眼のことだがな」

「僕の目のこと？」

「お前は、自分の目が金色だったことを人に言うなよ。」

あの目が見つかる、結構面倒なことになるんだ。

だから、俺が青色に戻しておいてやった」

「もどしておいた？」

「そう、こつやつたときにだ」

ラーベラムはそう言いながら、アルの左目を隠すように手を伸ばす。

それは、この街でアルがラーベラムと再会した時にした動作だった。

「ああ！

あのときに僕の目の色が元に戻ったんだ！

でも、こつやつたの？」

手品みたいですよ、ラーベラム！」

「コラコラ、あまり大声を出すと、おっさんに聞かれるだろう。」

……あれは手品じゃないんだが……そのうちお前にもできるようになるよ」

「そうなんだ。」

よし、それじゃあ今から、頑張って練習しよう」

「練習ねえ……練習したからできるようになるってもんでもないけどな」

「えー、じゃあどうやるのか、教えてよラーベラム」

「だから、そのうち自然にできるようになるって」

「ムー、けち」

「よし分かった。」

「教えてやるが、簡単にはできないぞ」

「大丈夫、僕がんばる！」

「なら、今から腕立て伏せを百回に、腹筋を五十回。それから会談があるところでは、ウサギ跳びをしながら移動でだな……」

百パーセント純正の嘘をついていくラーベラム。しかし、本人は適当に言ってるのだが、少年のアルはキラキラと輝く目をしながら頷いている。

「……てなことを、毎日欠かすことなくやり続けるんだ。」

「1日でも忘れたら、また始めからやり直しだからな」

「よし、分かった！」

それを毎日すれば、できるようになるんだね」

「頑張れよアル」

(さっさと諦めろよ)

心の中で真逆のことを言って、ラーベラムは心にもない応援をアルにした。

「ああ、それとアル」

「なにラーベラム？」

「今日から、俺はお前の兄貴になってやる」

「……本当、ラーベラム？」

「おう、俺は本気だぞ」

「やったー、よろしくねラーベラム……兄さん」

「ん、よろしくな、アル」

アルは、輝くように笑った。

ラーベラムは、不遜な笑みを浮かべた。

兵士たちへの暴力行為はあったものの、ルートニックが巡察士としての権力をもちだした、兵士たちはグウの音も出さずに、ラーベラムを釈放にした。

21

「わー、ルートニックってすごく偉いんだね」と、アルは関心の声を上げる。  
「まったくだ。巡察士さままだな」と、ラーベラムも同調して見せた。

「ラーベラム、お前がアルの兄だと分かった。だから、釈放してやったんだぞ」  
「ああ、今度兵士と喧嘩するときは、確実に勝てるように喧嘩する」  
「……お前、今すぐ牢屋に戻してやるうか？」  
「ただの冗談だよ。そんなに怖い顔するなよ」  
「……お前とは知り合っただけだが、全然冗談に聞こえないぞ」  
「ハハハ」  
「……」

笑ってごまかすラーベラムだ。

(こいつ、絶対また同じことをしでかすな)

だが、笑うラーベラムに、ルートニックは全く反省の色を見てなかった。

「ところでお前たちには、俺と一緒に帝都まで来てもらおうぞ」

「帝都？」

「どうして、あんなところに？」

帝都と言つ言葉に、ラーベラムが反応する。

「すごい。」

帝都って言えば普通の人がいけない場所だってお父さんが言つたよ。

「すごく偉い人でないと、いけない場所なんでしょう？」

「そうだな……さすがは巡察士様だ」

ラーベラムが、嫌味たつぷりに言う。

リューシャン帝国の帝都は、貴族と宮廷につかえる官僚以外には住むことが許されていない。

だが、ルートニツクの身分である巡察士は、皇帝の直属であるため、帝都への出入りの許可とともに、帝都内に住宅を持つ権利が与えられているのだ。

「ジュンサツシ……偉いんだね、ルートニツク」

「言いかお前ら、巡察士はあくまでも密偵のようなもんだ。」

「あんまりその名前を連発するんじゃない」

「わかった、ルートニツク」

「ハイハイ、分かりましたよ、巡察士様」

わざと巡察士と呼ぶラーベラムだが、ルートニツクは視線を飛ばして警告するが、ラーベラムは適当に受け流した。

「それより、ルートニツクのおっさん。」

「どうして俺達が、帝都に行かないといけないんだ？」

「俺たち兄弟は、帝都にいく用事もなければ、身分だって違う」

「お前の弟は、間違いなく黄金の瞳をもっていた。  
兵士たちが見た頃には、すでに青い目になっていたが、街の人間  
から、黄金の色の目をしていた少年がいたとの情報を得ている。  
つまり、目の色が戻る前のアルのことだな」

(チツ、このおっさんそんなところにまで調べたのか?)

ルートニツクの手際の良さに、舌打ちするラーベラム。

「だが、どうやらラーベラムはアルの目が黄金の色をしていたこと  
は知らないみたいだな」

「知らないも何も、そんなバカな話があるわけないだろう」

「お前が知っていてトボケているのか、あるいは本当に知らないの  
かは関係ない。」

「いずれにしても、帝都までは同行してもらおうからな」

「……」

「僕、帝都を見てみたいよ、兄さん」

ラーベラムは、帝都に行きたくなどないのだが、生憎アルの方は  
違った。

生まれてこの方、辺境の村しか知らなかったアルは、今までに様  
々な場所を旅してきたことが嬉しかった。

そして、大きな街や、帝都の姿も見てみたい。

少年の心には、強烈な好奇心が宿っているのだ。

「……まあ、アルがそんなに言うなら、帝都の姿を拝んでみるか」

あまり乗り気な様子でないラーベラム。

しかし、彼が同意したことで、アルが青い瞳を輝かせる。

「よし、そうときまれば、目指すは帝都だ！  
エイエイ、オー」

一人元気に腕を振り上げて、アルは嬉しさから駆け始める。

「ほら、2人とも早くしないと置いてくよー」

駆けるアルは、あとから歩いてついてくる2人に手を振りながら、  
「はやくはやく」と促す。

「あせらなくても、帝都は逃げないから安心しろ」  
と、ルートニックは苦笑する。

「前見て歩けよ、でないと……」

ドテッ

アルがこけた。

「手遅れか」

仕方のない奴だと思うラーベラム。だが、アルはすぐに元気よく立ち上がると、再び駆けながら2人の前を走っていくのだった。

「……おっと、残念だが、まだ今回の話は終わってないぞ」

ギョッ

ラーベラムは歩いてしていると、近くを歩いていた太った男の首に、手をまわして捕まえた。

「グエエツ、な、何をする！」

突然の捕まってしまった男が声を上げる。

「アントン、お前俺の顔を見忘れたのか？」

だが、そんなことはお構いなしのラーベラムだ。にやりと笑いを浮かべる。

「顔だと、そんな腫れた顔の男なんて……」

「そうだった……」

殴られまくったから、仕方がないか。

だが、声で分かるだろう？」

「……まさか、ラーベラムか？」

「そのとおり」

「ゲエエエー！！！」

お前から逃げられたと思って、安心していただけなのに！！

そんな、そんな！

バカなことが！！！」

「おいおい、俺とお前の仲なのに、怯えるなよ。」

それよりアントン、よかったな。

俺たちこれから、帝都に行くことになったんだが、お前ももちろ

んついてくるよな。

「なんたって、帝都はこの国一の金持ちが集まるんだ。商人だったら一度は目指さないとな」

「い、イヤだー！

誰がお前となんか行くか！

「お前のせいで俺は破産寸前に……」

と、心の中では強烈に叫びたいアントンだが、小心者の彼には、そこまで叫ぶ勇気がない。

「オッサン、こいつ俺の知り合いなんだけど、帝都まで連れて行ってもいいよな？」

「ん？」

「まあ、1人ぐらい増えても問題あるまい」

あっさりとルートニックから同意を取り付けるラーベラム。

（だ、誰か！

俺をこの男から助けてくれー）

そう、心の中で叫び声をあげるアントンだが、彼の心の声は誰にも聞こえるはずがなかった。

## 22 帝都

### 22 帝都

「……」

アルは目の前にある光景が信じられないといった様子で、黙り込んでいた。

口をぽかんと大きく開けて、それさえも忘れてしまっているようだ。

どこまでも長く続く城壁。そしてその向こうには、広大な貴族たちの館が続く。

そして、それらすべてを凌駕する、圧倒的な存在感を放つ、宮廷の姿。

通称『青の天蓋』と呼ばれる巨大な城は、その名にふさわしく、天井のすべてが青のラピスラズリで作られている。

この天井だけに、実に国家予算の三年分が浪費されている。

帝国の三代皇帝の時代の瀟洒と浪費の果てに作られた、豪勢きわまる定常だ。

行商のアントンは、そんな青の天蓋の姿をマジマジと見て、一体あれを売ればいくらになるんだとブツブツ呟いている。

一方、お金と言えば、お菓子を買うことぐらいしか知らないのはアル。

そんなアルではあるが、帝都の光景を目の当たりにして、もはやここが別世界のように思えた。

「すっーーーーーごーい！」

と、ようやく完成の声を上げる。

「そうだな、俺がいたときよりも全然大きくなっている」

と、ラーベラムも関心の声を上げた。

「ここにいた？」

「いや、ただの言葉のあやさ。

帝都を遠くから見たことがあるが、こんなに近くで見るとさすがにでかいな」

ルートニツクの疑念の質問に、ラーベラムは適当にごまかして答えた。

(まあ、俺がこの街を作ったなんて言っても、誰も信じないだろうがな)

と、心の中でラーベラムはひとりごちる。

彼の過去には、さまざまな歴史があるのだ。

「いいか、アル。

珍しがるのはいいが、周りばかり見てて、迷子になるなよ」

ルートニツクが注意する。

帝都に出入りできる身分にある、ルートニツクにとっては、帝都の景色はそこまでの感銘を呼び起こすものではないのだろう。

かわりに、帝都は初めてであるアルとアントンのことを心配する。特に、少年のアルが迷子になっては一大事だ。

ただ、ラーベラムに関しては、「……まあ、この男は大丈夫だろう」と、根拠のない確信がルートニックにはあった。

そんなルートニックに案内されて、一行は帝都の中でも城壁の近くにある館に案内された。

いや、館ではなく、マンションだった。

「ここに俺の部屋がある」  
「部屋？」

ルートニック、このお屋敷に住んでるんじゃないの？」

と、アルはマンション全体をルートニックが住んでいる館だと勘違いする。

「バカ言え。」

俺は帝都に住んでいるが、家は下っ端官僚用の部屋だぞ」

「やっぱり、ルートニックって貧乏なんだ」

「ち、違うー！」

小さな部屋で暮らしているだけだ」

「オッサン、それを貧乏って言うんだらう」

アルとラーベラムに言われて、ルートニックは押し黙ってしまった。

「ええい！」

俺だって好きでこんなところに住んでるんじゃない！

俺だってな、もっと大きくて庭のある家にだな……」

「ま、今の歳でこんなところに住んでるなら、将来は望み薄だな」

グサッ！

ものすごく痛いところをつかれて、ルートニックは気づついでし

まった。

「フ、フフ、だが見てろよ。」

俺だっていつか貴族の屋敷みたいにかい館を勝ってだな……」

「ルートニックさん、あなたの給料でそんなことができるんですか？」

「……」

行商のアントンは、さすがに経済の点では抜け目がない。

ルートニックは巡察士という身分にだが、これは皇帝に直属する身分であっても、給料は薄給だった。

「……」

結局、とどめを刺されてしまったルートニックは、それ以上なにも言わなかった。

23

23

ルートニツクは、自分の家（部屋）に戻ると、そこで衣服を旅で使っていたものから、正装へと着替えた。

「うっわー、ルートニツクまるで貴族みたい！」

と、アルが声を上げる。

「フフン、俺はこれでも栄えあるリューシャン帝国の騎士だぞ」

「すごい！」

騎士様なんだ！」

興奮するアル。

「と言っても、騎士は最下級の貴族だけだな  
いららないことを言うラーベラムだ。

だが、それでも少年の心にはどこ吹く風。

「それでも貴族様なんでしょう、すごいじゃん！」

僕、ルートニツクを尊敬しちゃう！」

と、素直に言った。

「ハハハ、これでようやく分かっただろう。

俺は貧乏人ではなく、由緒ある騎士様だってな」

「ああ、そうなんだ！」

ルートニツクって貧乏な騎士様なんだ！

すごいけど、格好悪いね」

ガクリッ

貧乏であることから離れてくれないアル。

せつかくさつきまで気をよくしていたのに、今の一言でルートニツクはがっくりしてしまった。

「ところで、お前たちにもまともな格好をしてもらっぞ」

「お前たち？」

「アル。それにラーベラムもだ」

「うわー、僕も立派な格好ができるんだ。

ワクワク」

「俺もかい」

「ああ、お前たちには王宮にきてもらっ必要があるからな」

「王宮、スッゴイ。」

僕知ってるよ。皇帝様が住んでいるところなんだよね」

「……」

感嘆の声を上げるアルに、しかしラーベラムは無言だ。

「どうした、お前は王宮に行ってみたくないのか？」

「ああ、どうも俺は偉い人間のいる場所が、肌に合わないんでな」

「それでも、お前にも来てもらっぞ」

#### 黄金樹の瞳

ルートニツクが、アルを連れているのも、ラーベラムたちの帝都への同行を許したことも、すべてアルの黄金色の瞳のためだ。

今は、ラーベラムによってアルの瞳は普通の色に戻っているが、ルートニツクはいまだに、アルの持っていた黄金の瞳に執着しているのだ。

もしもあれが黄金樹の瞳であれば、とてつもないことになるであ

ろっから。

「仕方ない。それじゃあ俺も王宮に行かせてもらいますかね」

「ああ、しっかり見物をしてよ。」

「なんだって、お前みたいな庶民には縁のない場所だからな」

「ふん、好きに言え」

ルートニツクの嫌味な言葉を、ラーベラムは不機嫌に返した。

「あの、ところでワシはどうなるんですか？」

「ん？」

「アントン、お前は付いてこなくてもいいぞ」

「ええっ！」

「なぜですか、この2人はよくて、どうして私は王宮に言っちゃいけないんですか！」

「私だって一生に一度くらいは王宮の中を見てみたいんですよ！」

「この帝都に来れたんだから、この機会を逃したら2度とないじゃないですか！」

「以外にも、アントンは王宮に対して興味深々らしい。」

「それもそうだ。」

「一般人は帝都の中に入ることを許されていない。まして、王宮の中ともなれば、生涯に一度として入ることのできない場所なのだ。」

「ねえ、ルートニツク。」

「アントンも連れて行ってあげようよ」

「ダメだ。」

「用のある人間以外は、王宮に連れて行くわけにはいかない」

「えー、いいじゃん。ルートニツクのケチ」

「何を言われても、ダメなもんはダメだ」

懇願するアルに、ルートニックはとりつく島もない。

ならばとねアルのねだるような視線が、今度はラーベラムの方を向いた。

「ねえ、兄さん」

「アル、あんまりルートニックを困らせるなよ」

「えー、だってー」

駄々をこね始めるアル。

しかし、結局アルとアントンの願いは届かなかった。

「仕方ないです。」

私はここで待ってますからね」

と、王宮へ向かうアルたち一行を見送り、アントンは一人、ルートニックの住んでいる家（部屋）で帰りを待つことになった。

## 24 青の天蓋の城

### 24 青の天蓋の城

ガラガラガラガラ

身だしなみを整えた一向を乗せた馬車が、宮廷へと走っている。

馬車に乗ったアルは、帝都の珍しい光景に目をうじ割れて、先ほどから窓の外わ食い入るように見続けている。

時に、大声をあげたり、馬車にいるラーベラムたちに「すごいゆ、すごいよ」と歓声を上げていた。

「子供って奴は、元気がいいな」

と、ルートニツクは感心する。

一方、同じ馬車に乗る、ラーベラムはさきほどから何やら黙り込んで一言も話す様子がなかい。

「まさか、お前緊張してるんじゃないよな」

「ハアツ、そんなわけないだろう？」

と、ラーベラムは返す。

「だよな、お前がそういう玉じゃないってのは、ここ数日でもうわかってるからな」

と、ルートニツクはわけしりに行った。

ルートニツク達と出会ってから、この帝都に来るまでに数日の旅程だ、その間に、ルートニツクはラーベラムの性格がある程度わ

かっってきたのだ。

始めは、兵士相手に喧嘩を吹っ掛けるようなバカだと思った。実際、今でもその評価は変わらないが、見た目ほどバカではないことも分かってきていた。

(正直、この俺にもこの男が玉に何を考えているのかよく分からん) 巡察士として、各地を回ってきたルートニックである。

巡察士は各地の官僚たちの横暴などを暴くほかに、市井の噂や情報収集なども行っている。

今までに様々な人間を見てきたルートニックは、人の心を見抜くことに自信があった。

とはいえ、そのルートニックの眼力をもってしても、ラーベラムは理解できない部分がある。

表面は単純そうな男なのに、時として理解できない深みを見せる。

(まあ、誰の心の中でって見通せるはずがないからな)

それが、結局ルートニックの行きつく考えになった。

とはいえ、心を見通すと思った時に、自然と彼の視線はアルの方を向いた。

(この少年の左目は今は青い色をしている。

だが、たしかに金色の目をしていた……)

もしも伝説の黄金樹であるならば、人の心の中をすべて見通せるはずなのだから。

とはいえ、そのことはルートニックにもまだ確信がもてない。

「遺憾な、考えても仕方のないことだな」

と、ルートニツクは頭を降って、さまざまに浮かび上がる考えを一新した。

そして、気晴らしに、目の前のラーベラムに話しかける。

「だが、驚いたぞ。

お前この前はボコボコにされてたのに、よくこの短い間に顔が元に戻ったな」

兵士たちとの喧嘩から数日。腫れあがっていたラーベラムの顔は、その後急激な回復力を見せていた。

まだ若干殴られた跡が残ってはいるものの、あのとくに比べれば彼の顔はほとんど元通りだった。

「昔から、回復力はあるんでね」

「そうか、まるで獣のような回復力だな」

「ま、そう言われても仕方がないかもな」

と、ルートニツクの言葉をラーベラムは素直に受け入れた。

(まあ、俺は人間でないからな)

それが、ラーベラムの驚異的な回復力の秘密だ。

その後、一行を乗せた馬車は宮廷の門を超えた。

宮廷に上がった一行は、案内を受けて宮廷の上層階へと案内される。

「しばしお待ちを」

宮廷に仕えている執事は、そう言って部屋を出て行った。

何とも豪華な部屋に、3人だけがぼつんと残される。

「この部屋すごいよ。」

ルートニツクの部屋が10個は入るね」

「いや、20は入るぞ」

と、アルとラーベラムはそんなことを言う。

(……俺、この待合室でもいいから、これぐらいの家に住みたい)と、ルートニツクも心の中で、そんなことを考える有様だ。

その後戻ってきた執事に案内され、一行はさらに上層の階へと通される。

途中吹き抜けの大きな階段がり、きらびやかな金縁で飾られた人物画が掲げられていた。

「僕知ってる。」

グラガレス皇帝陛下さまだよ」

と、アルが指さしながら言った。

「よく知ってるな、アルは偉いな」

「うん、そうでしょう」

ルートニツクに褒められて、自慢げになるアル。

(グラガレス……久しぶりだな)

と、絵画の男に、ラーベラムは心の中で挨拶した。

かつて、ラーベラムはこの絵画の人物と出会い、契約を結んだ。

アルに現れたのは片眼の黄金樹の瞳だが、この絵画の男は両眼の黄金樹。それを人々は、全てを見通す瞳だと言って恐れ敬ったのだ。誰もが知っている、建国の大帝に纏わる昔話だ。

その建国の大帝の額縁が飾られた階段を上がると、広い通路に通される。

そこにもまた人物画が並んでいる。

どれもこれも古い時代のもので、その中の1人を見つけてしまったラーベラムは、思わず足が止まってしまった。

「これは大変な美丈夫だな。

若さではこの俺に負けてるが、俺にも負けない姿だ」

絵画の人物に向けて、ラーベラムが賞賛の声を上げる。

「そのお方は、グラガレス大帝陛下に仕えた建国の功臣の1人。ラーベラム卿であらせられます」

「あれ？」

ラーベラムって、同じ名前だね」

アルが不思議に声を上げる。

「そうだな。

珍しい名前だが、さすがは俺と同じ名前の男。  
建国の皇帝陛下の功臣とは、見事なものだ」  
ラーベラムは賛辞を惜しまない。

とはいえ、これは自画自賛だった。

何しろ、この絵画の人物ラーベラム卿なる人物こそが、今のラー  
ベラムの昔の姿なのだから。

「いいねえ。」

俺も歳をとつたら、ああいう味のある大人になるぞ」  
称賛をやめないラーベラムだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0859o/>

---

黄金樹の瞳

2010年10月10日08時38分発行